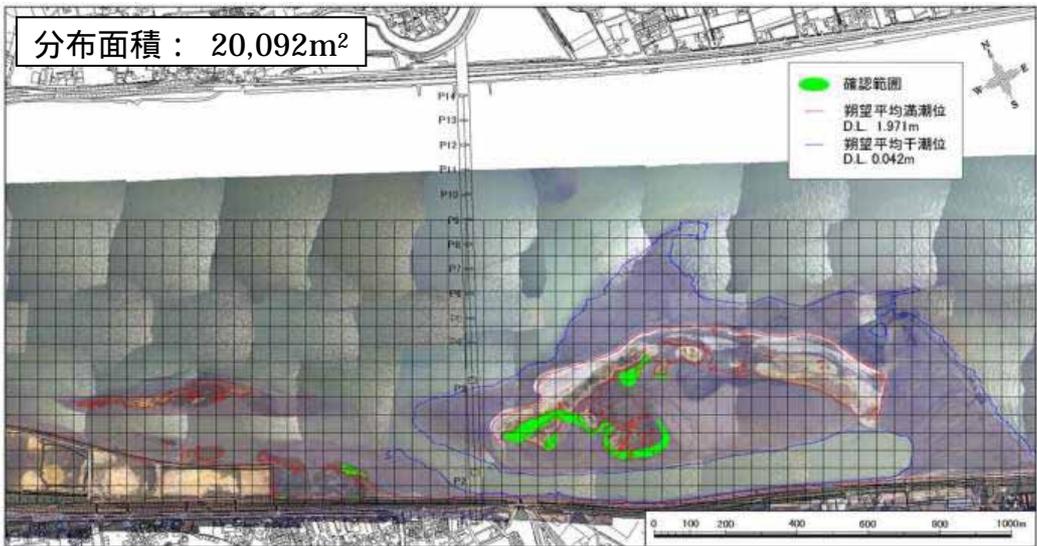


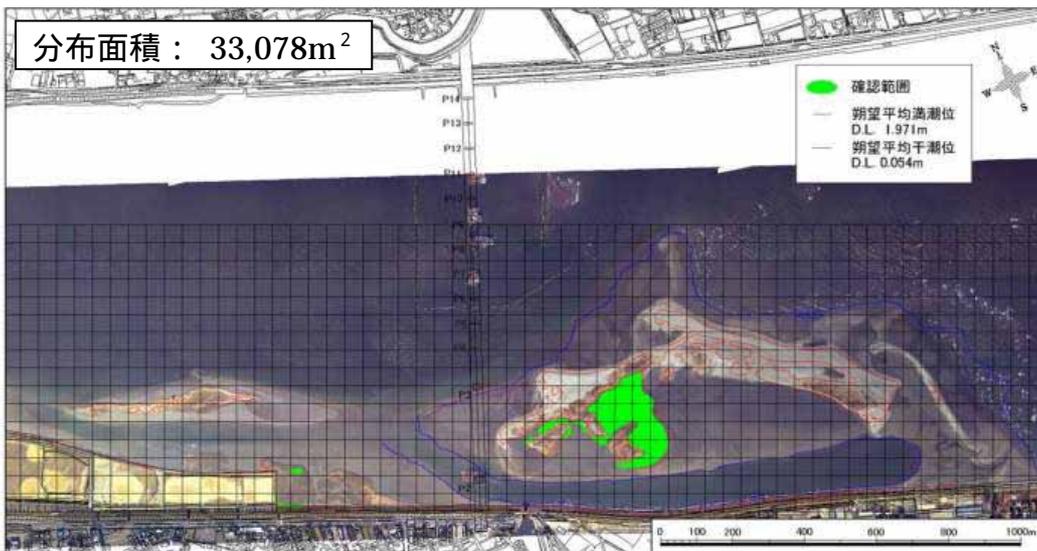
平成 15 年 春 フトヘナタリガイ確認範囲

(オルソ画像：平成 15 年 8 月 11 日撮影)



平成 15 年 夏 フトヘナタリガイ確認範囲

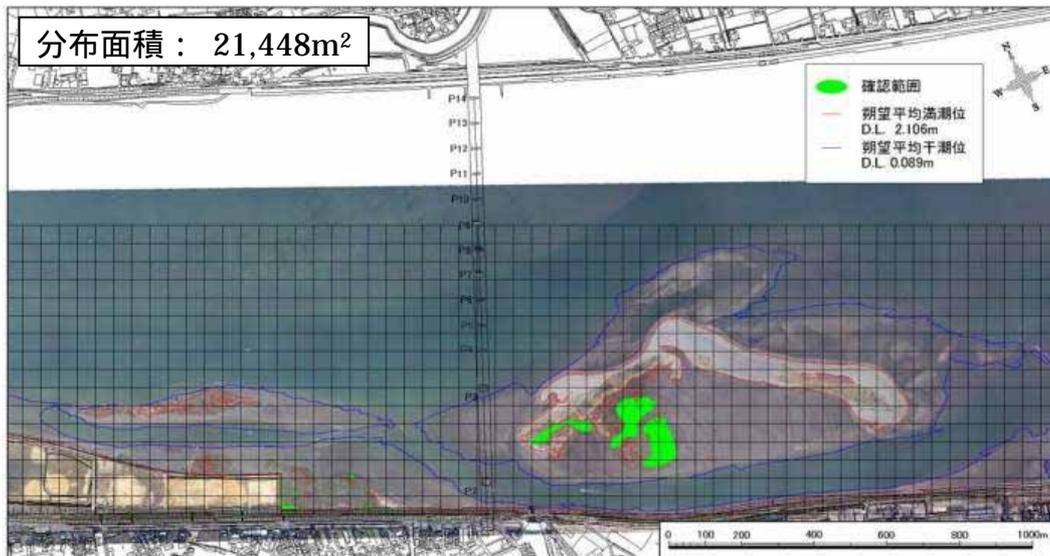
(オルソ画像：平成 15 年 8 月 11 日撮影)



平成 16 年 春 フトヘナタリガイ確認範囲

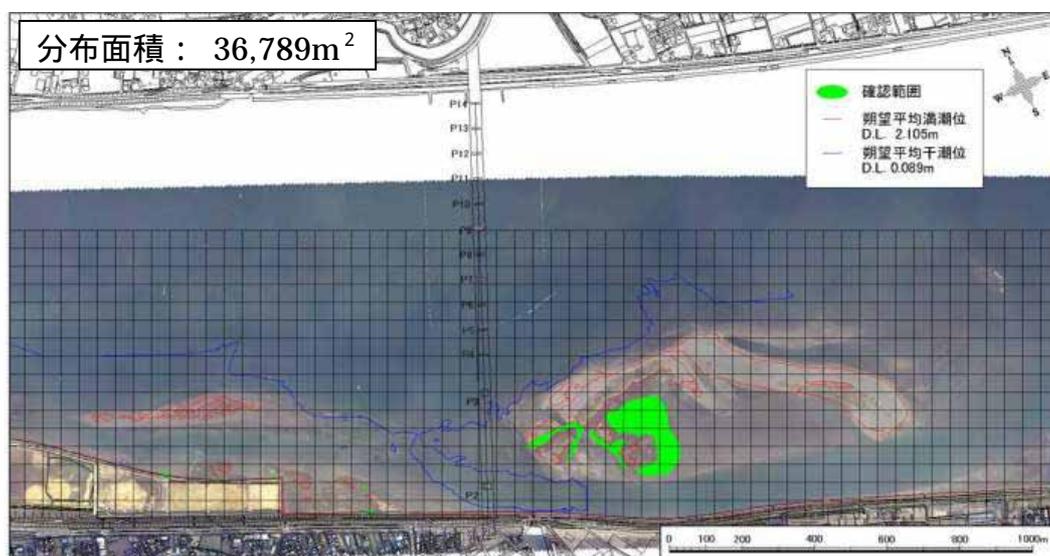
(オルソ画像：平成 16 年 3 月 10 日撮影)

図 6-3-3-6(1) フトヘナタリガイ分布図 (1/6)



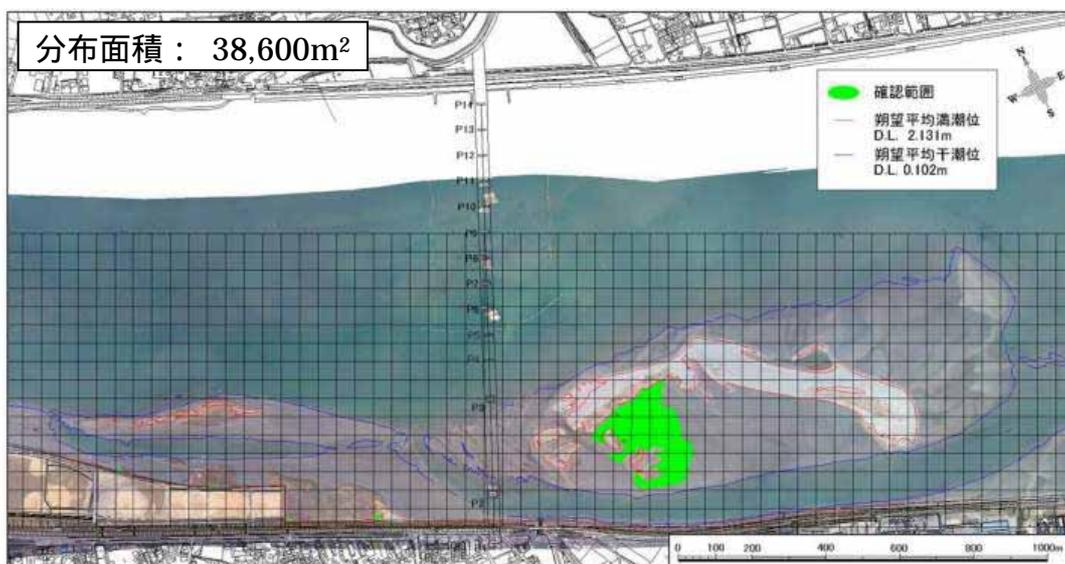
平成 16 年 夏 フトヘナタリガイ確認範囲

(オルソ画像：平成 16 年 10 月 14 日撮影)



平成 16 年 台風後 フトヘナタリガイ確認範囲

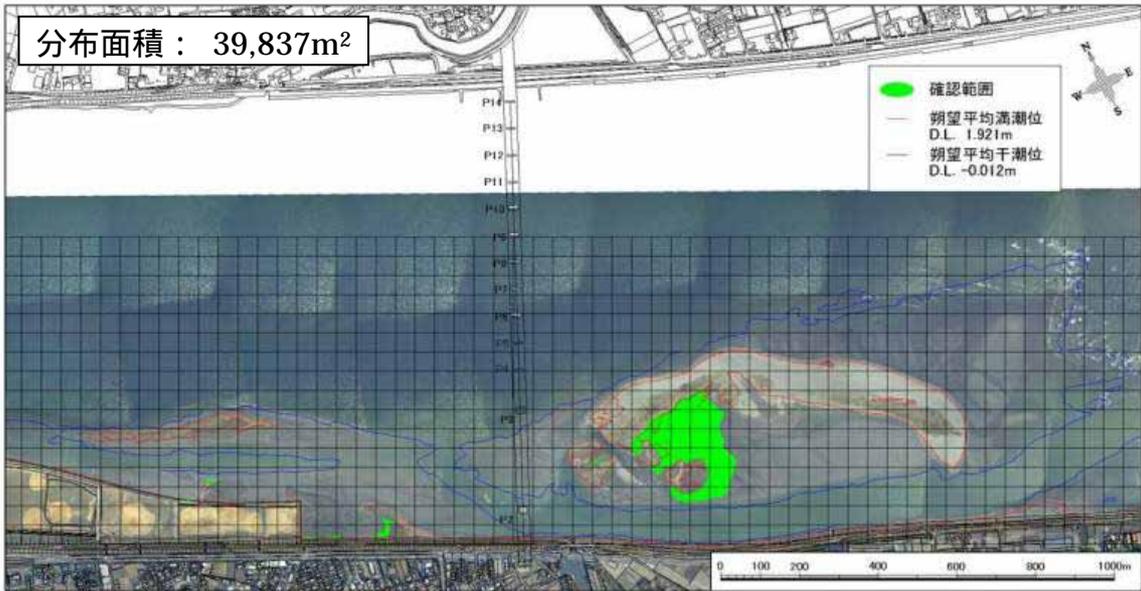
(オルソ画像：平成 16 年 11 月 8 日撮影)



平成 17 年 春 フトヘナタリガイ確認範囲

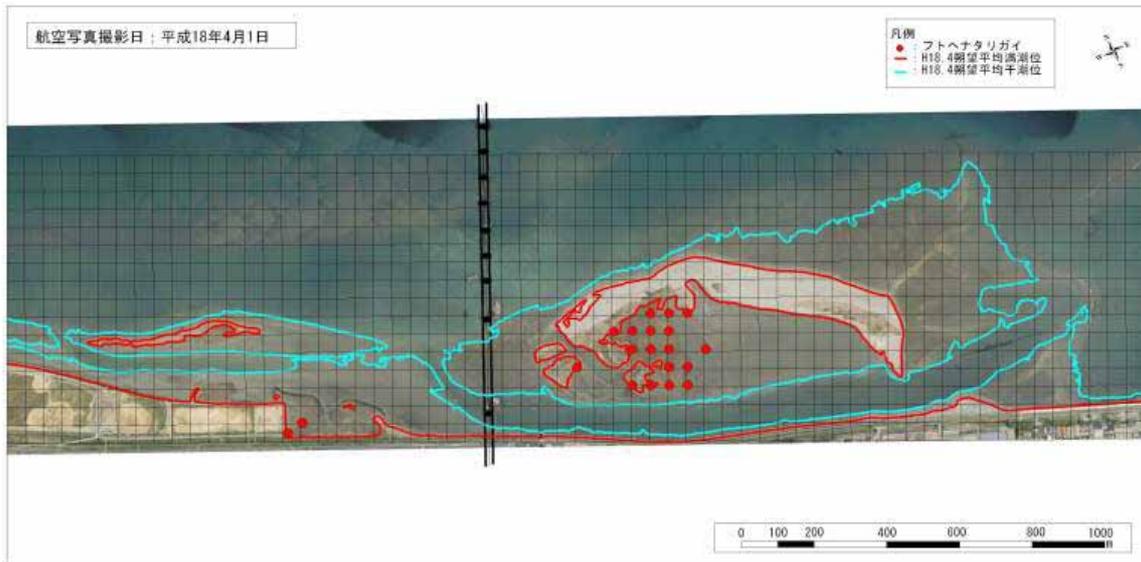
(オルソ画像：平成 17 年 3 月 14 日撮影)

図 6-3-3-6(2) フトヘナタリガイ分布図 (2/6)



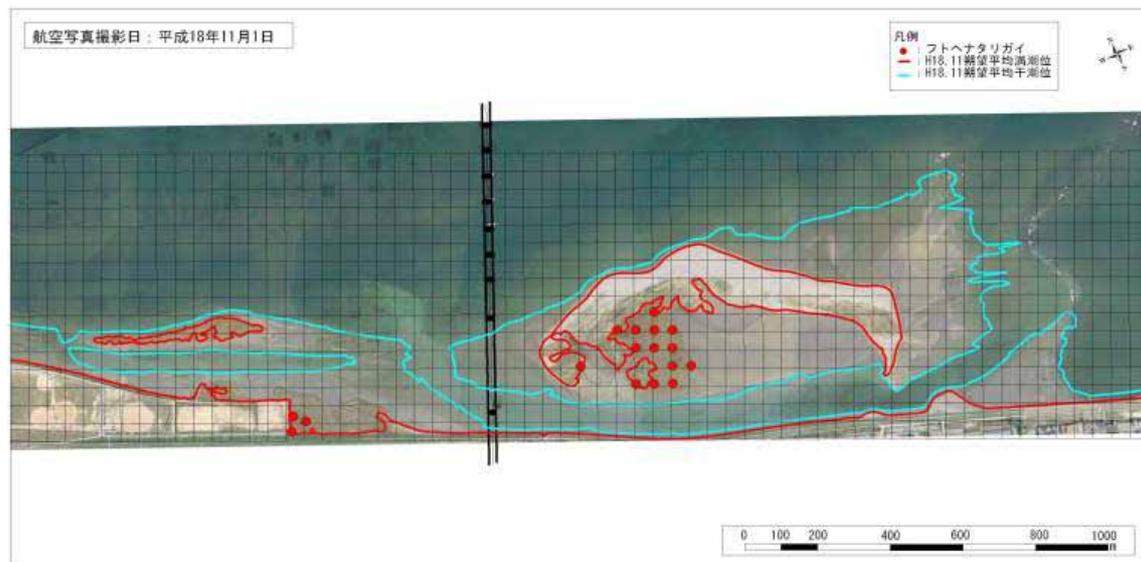
平成 17 年 夏 フトヘナタリガイ確認範囲

(オルソ画像：平成 17 年 9 月 30 日撮影)



平成 18 年 春 フトヘナタリガイ確認地点

(オルソ画像：平成 18 年 4 月 1 日撮影)



平成 18 年 秋 フトヘナタリガイ確認地点

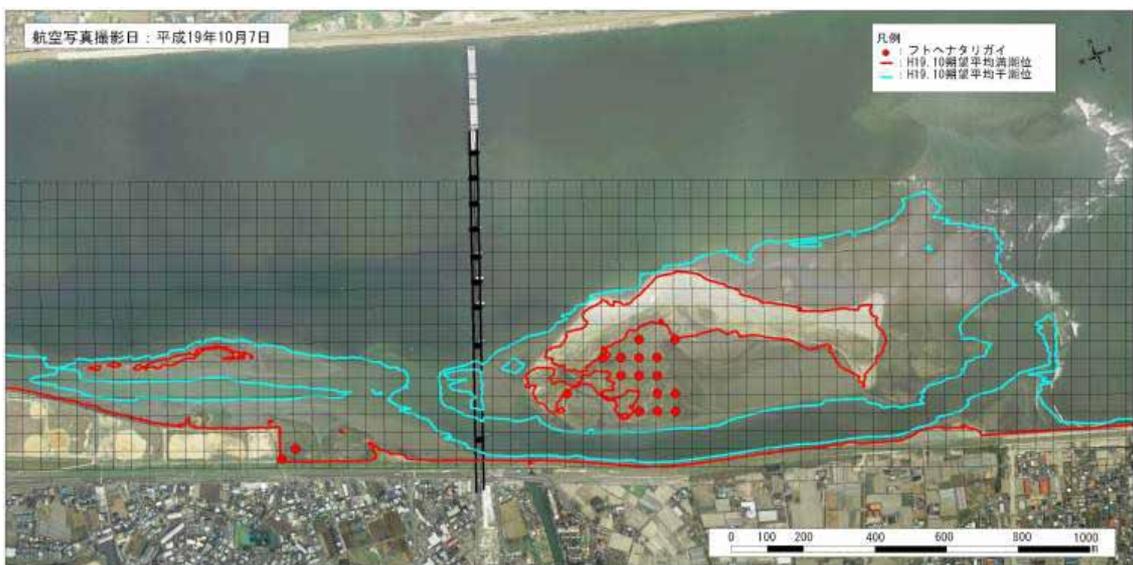
(オルソ画像：平成 18 年 11 月 1 日撮影)

図 6-3-3-6(3) フトヘナタリガイ分布図 (3/6)



平成 19 年 春 フトヘナタリガイ確認地点

(オルソ画像：平成 19 年 4 月 19 日撮影)



平成 19 年 秋 フトヘナタリガイ確認地点

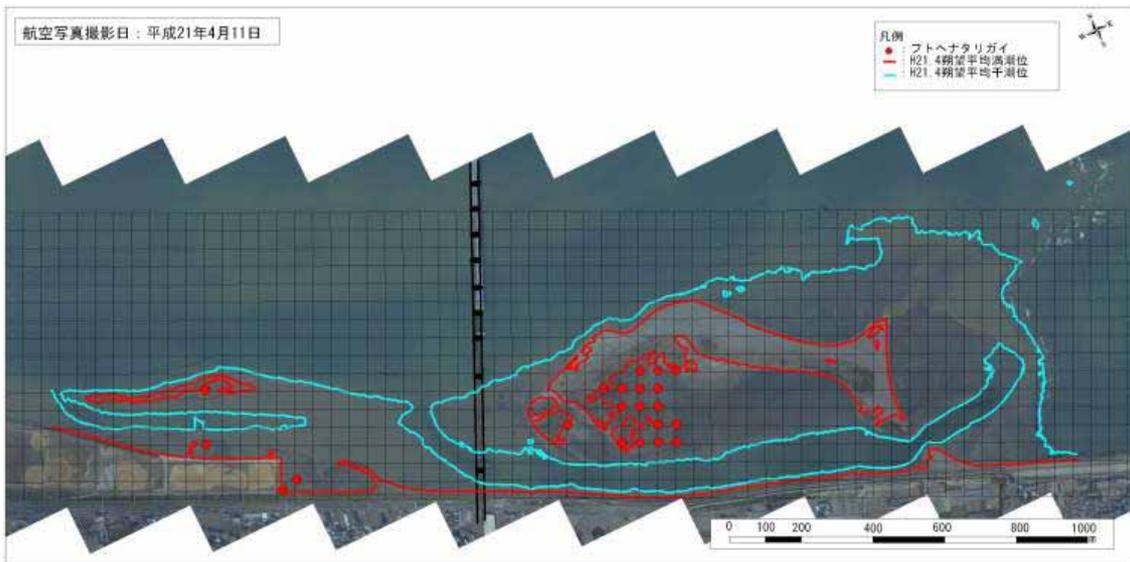
(オルソ画像：平成 19 年 10 月 7 日撮影)



平成 20 年 秋 フトヘナタリガイ確認地点

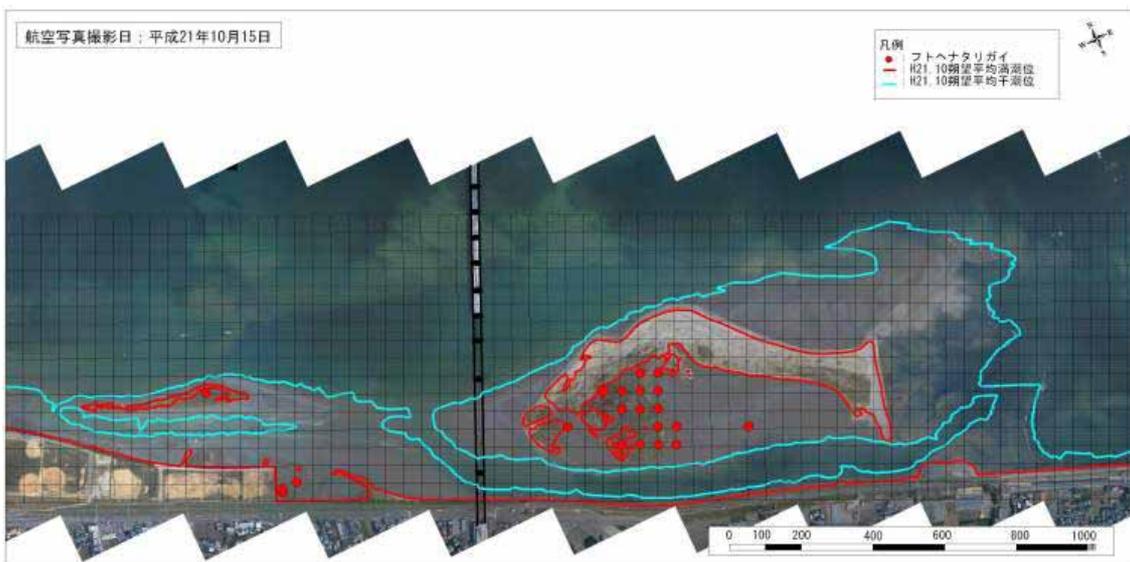
(オルソ画像：平成 20 年 11 月 12 日撮影)

図 6-3-3-6(4) フトヘナタリガイ分布図 (4/6)



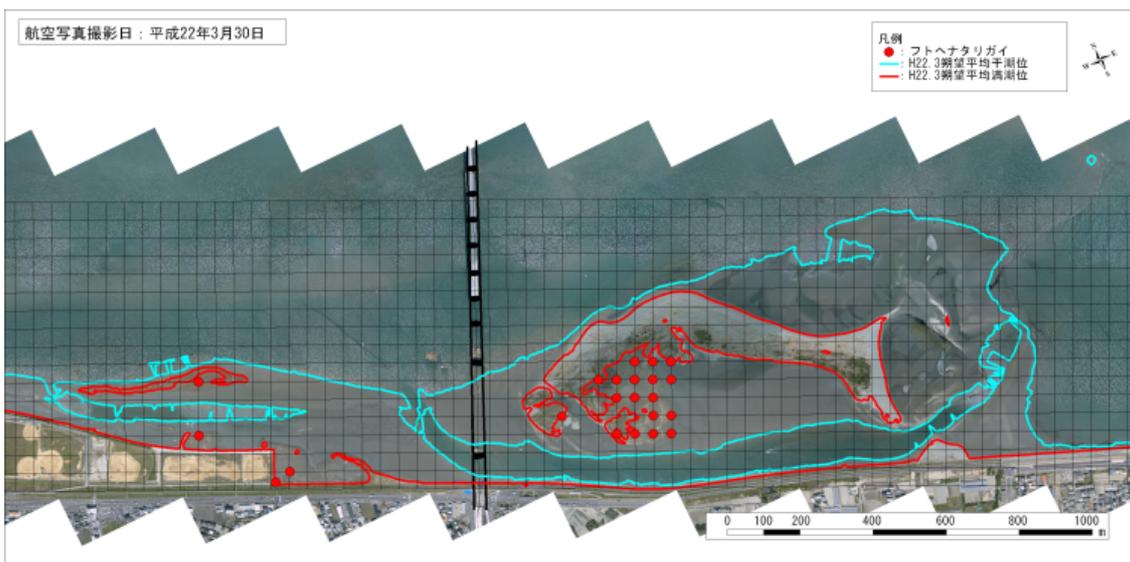
平成 21 年 春 フトヘナタリガイ確認地点

(オルソ画像：平成 21 年 4 月 11 日撮影)



平成 21 年 秋 フトヘナタリガイ確認地点

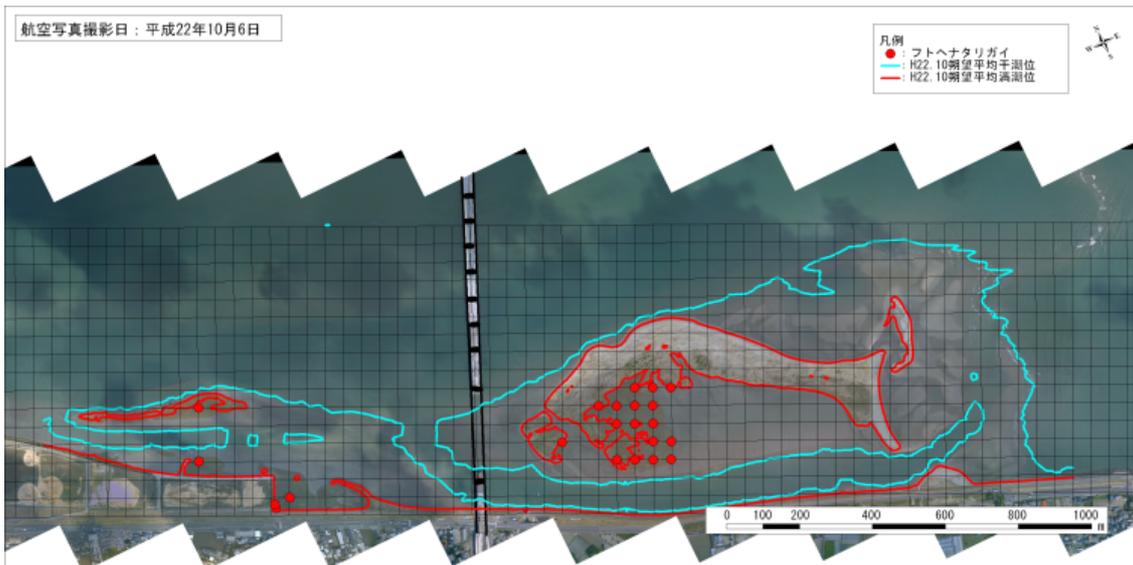
(オルソ画像：平成 21 年 10 月 15 日撮影)



平成 22 年 春 フトヘナタリガイ確認地点

(オルソ画像：平成 22 年 3 月 30 日撮影)

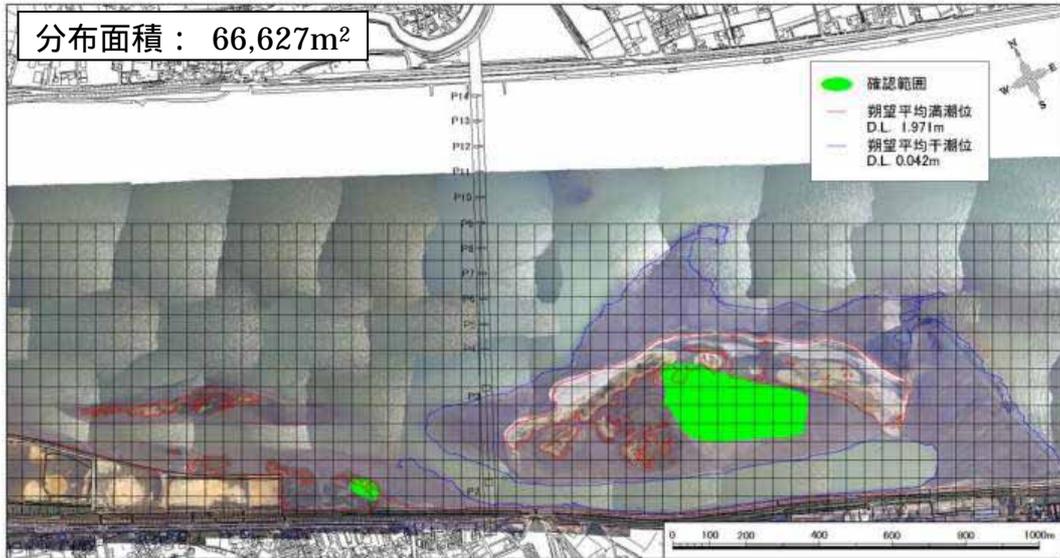
図 6-3-3-6(5) フトヘナタリガイ分布図 (5/6)



平成 22 年 秋 フトヘナタリガイ確認地点

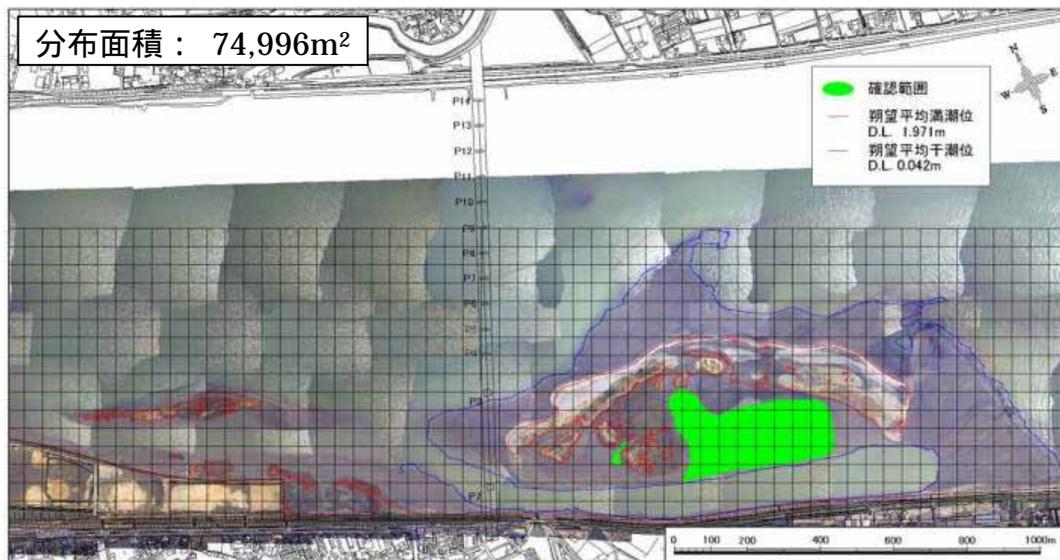
(オルソ画像：平成 22 年 10 月 6 日撮影)

図 6-3-3-6(6) フトヘナタリガイ分布図 (6/6)



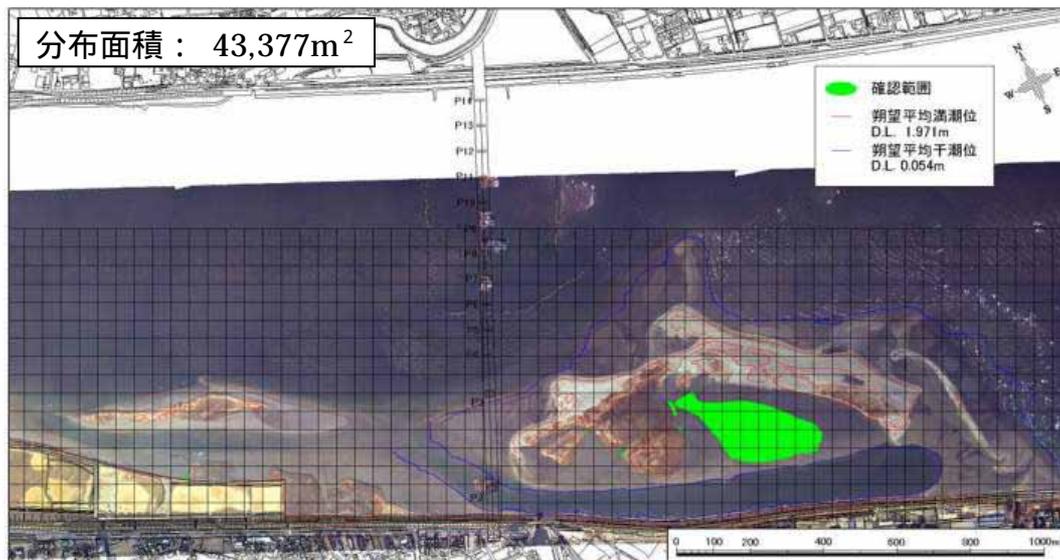
平成 15 年 春 ヘナタリガイ確認範囲

(オルソ画像：平成 15 年 8 月 11 日撮影)



平成 15 年 夏 ヘナタリガイ確認範囲

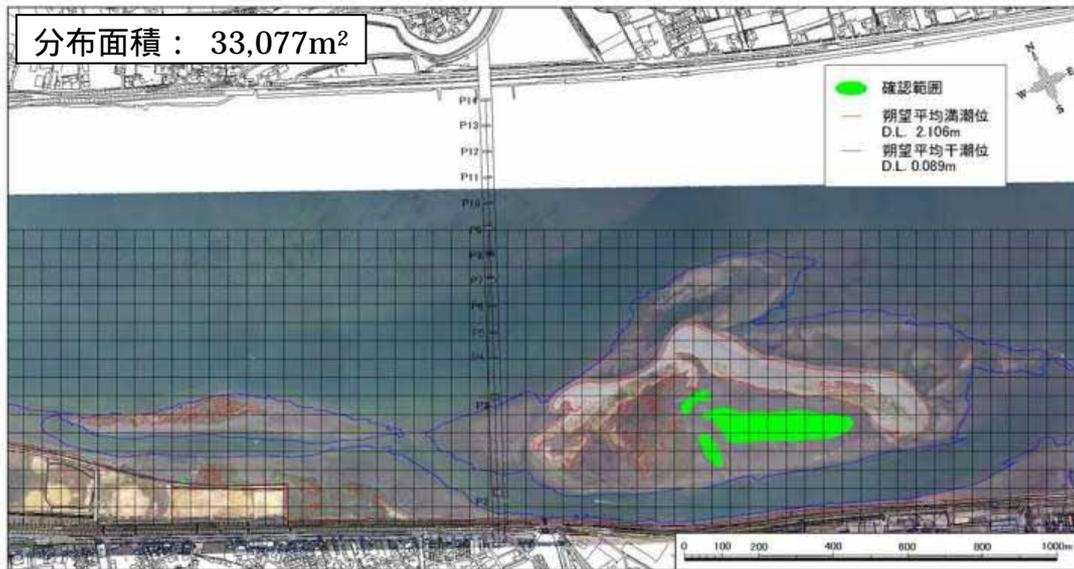
(オルソ画像：平成 15 年 8 月 11 日撮影)



平成 16 年 春 ヘナタリガイ確認範囲

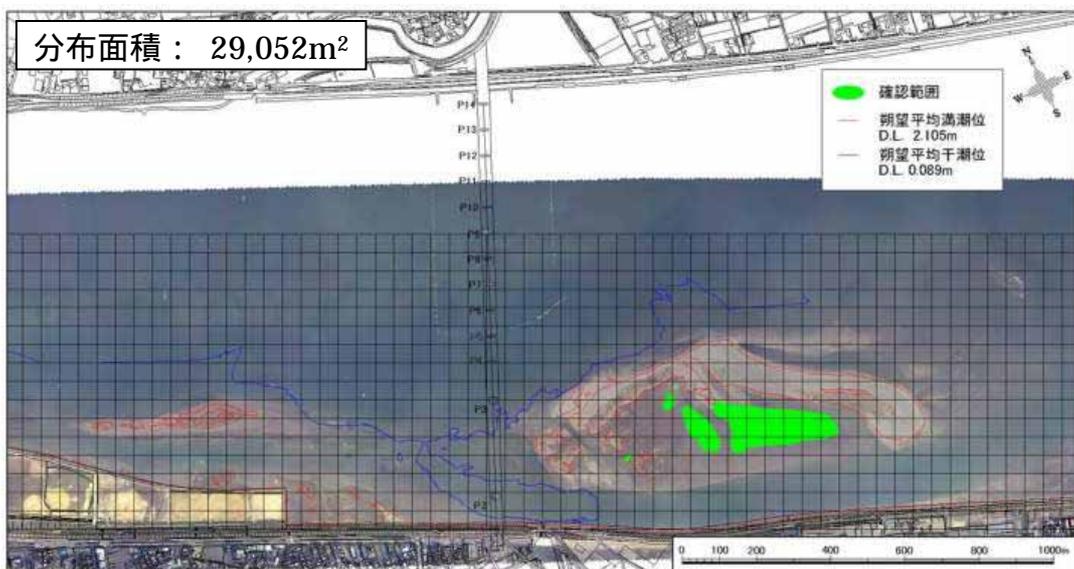
(オルソ画像：平成 16 年 3 月 10 日撮影)

図 6-3-3-7(1) ヘナタリガイ分布図 (1/6)



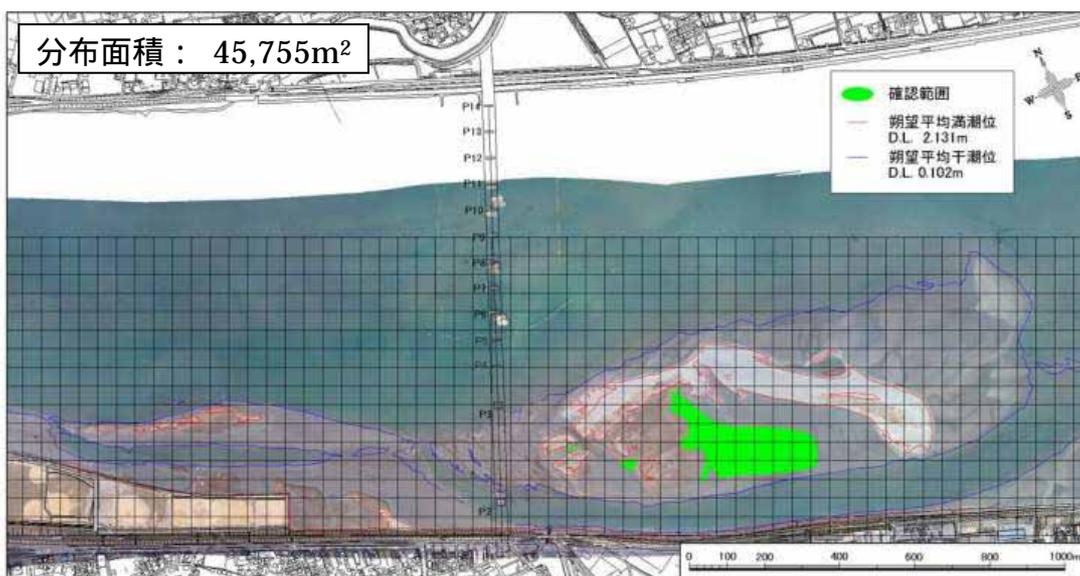
平成 16 年 夏 ヘナタリガイ確認範囲

(オルソ画像：平成 16 年 10 月 14 日撮影)



平成 16 年 台風後 ヘナタリガイ確認範囲

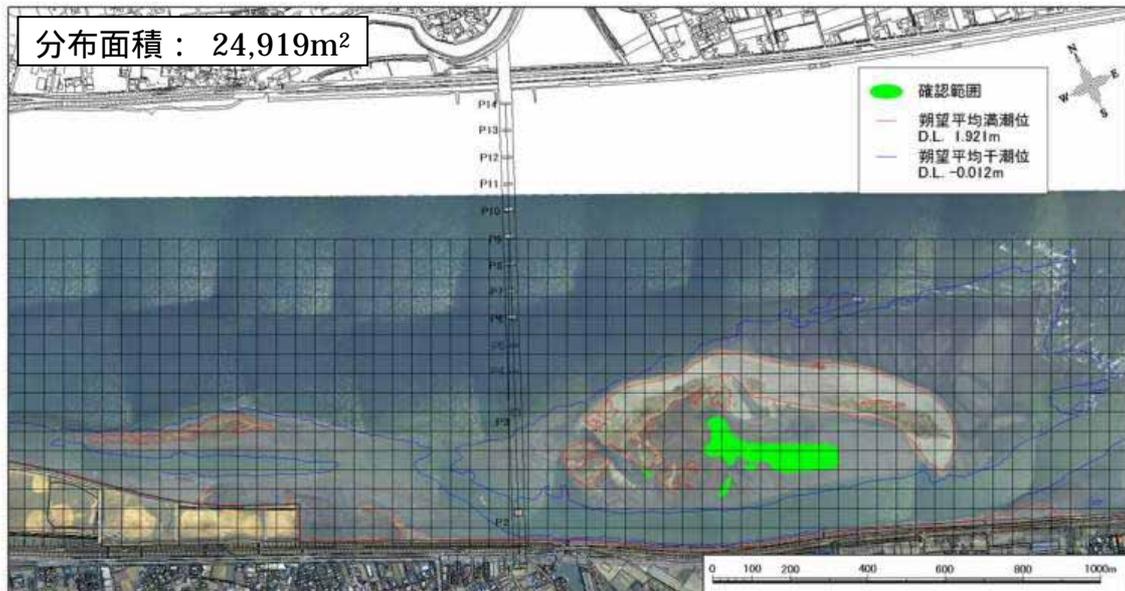
(オルソ画像：平成 16 年 11 月 8 日撮影)



平成 17 年 春 ヘナタリガイ確認範囲

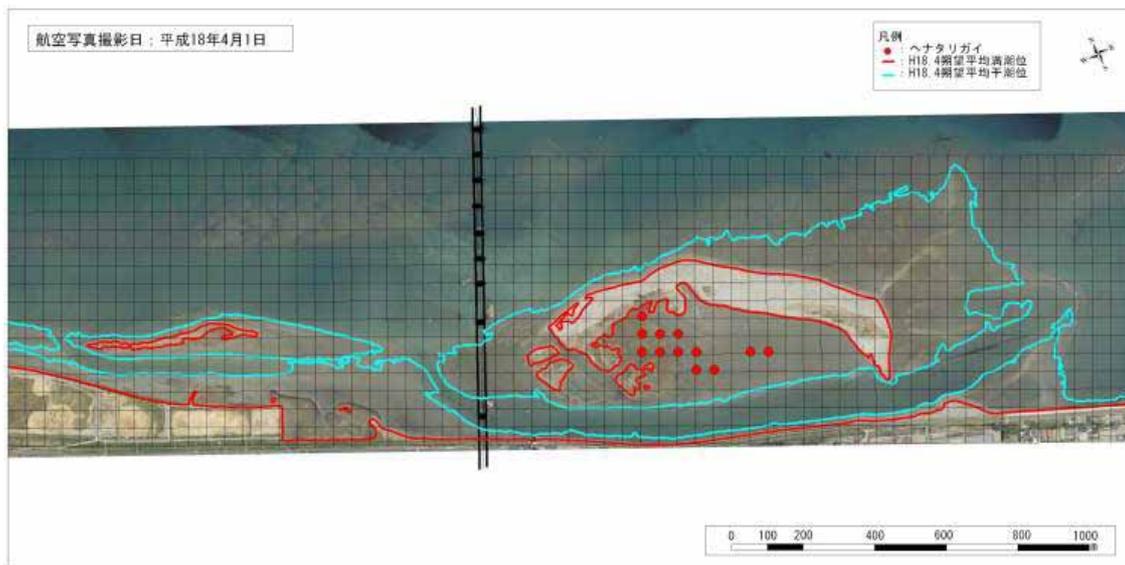
(オルソ画像：平成 17 年 3 月 14 日撮影)

図 6-3-3-7(2) ヘナタリガイ分布図 (2/6)



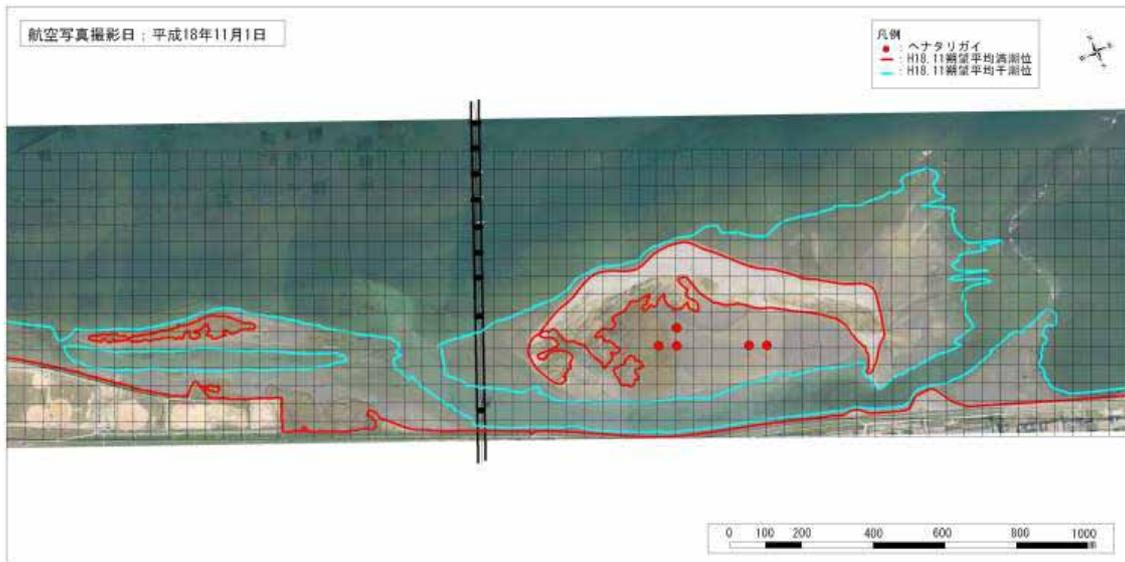
平成 17 年 夏 ヘナタリガイ確認範囲

(オルソ画像：平成 17 年 9 月 30 日撮影)



平成 18 年 春 ヘナタリガイ確認地点

(オルソ画像：平成 18 年 4 月 1 日撮影)



平成 18 年 秋 ヘナタリガイ確認地点

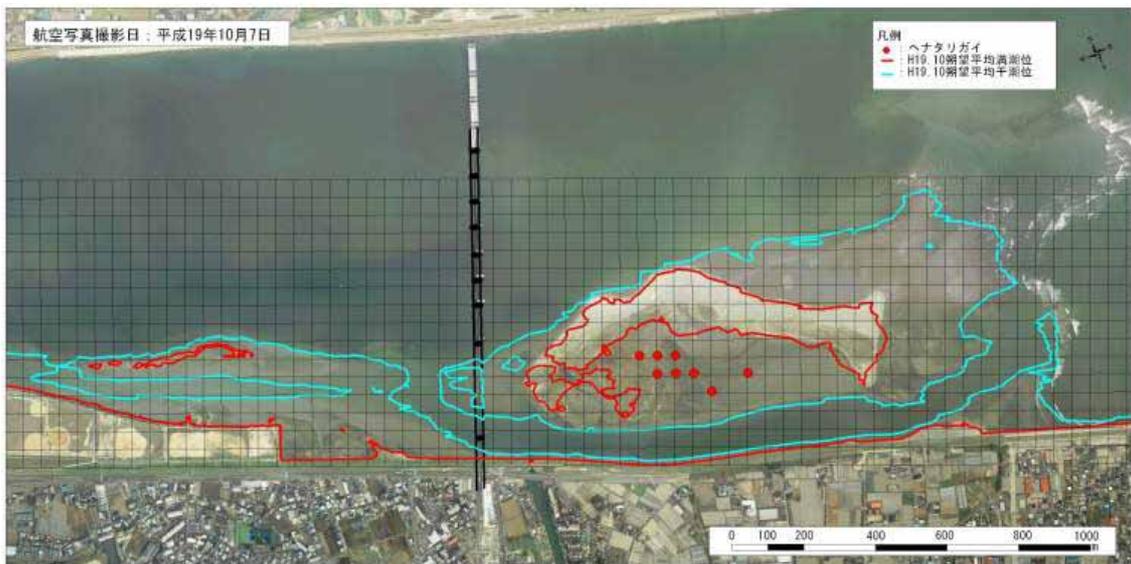
(オルソ画像：平成 18 年 11 月 1 日撮影)

図 6-3-3-7(3) ヘナタリガイ分布図 (3/6)



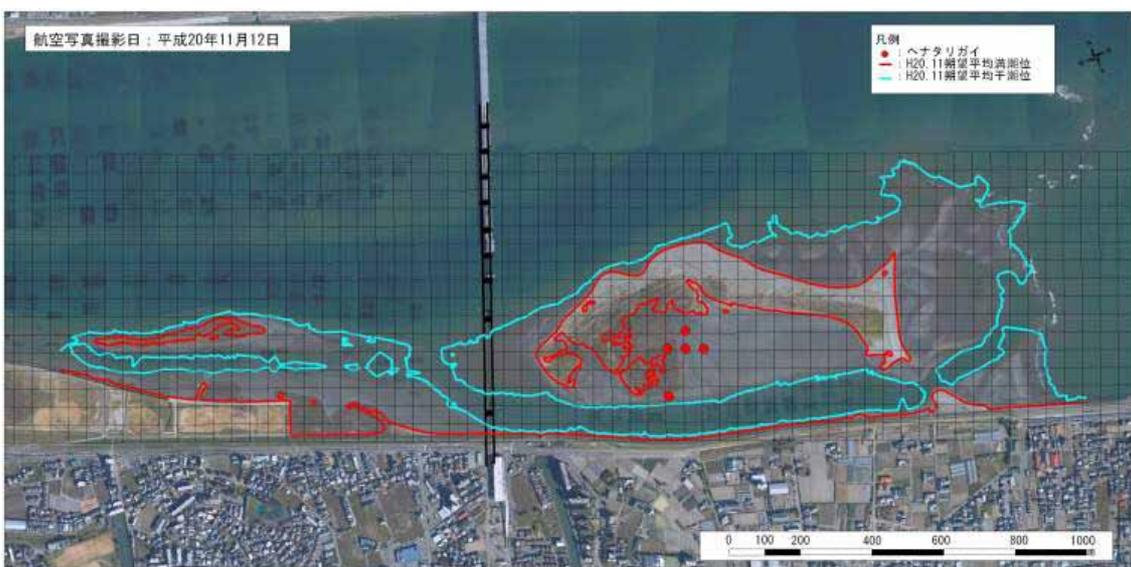
平成 19 年 春 ヘナタリガイ確認地点

(オルソ画像：平成 19 年 4 月 19 日撮影)



平成 19 年 秋 ヘナタリガイ確認地点

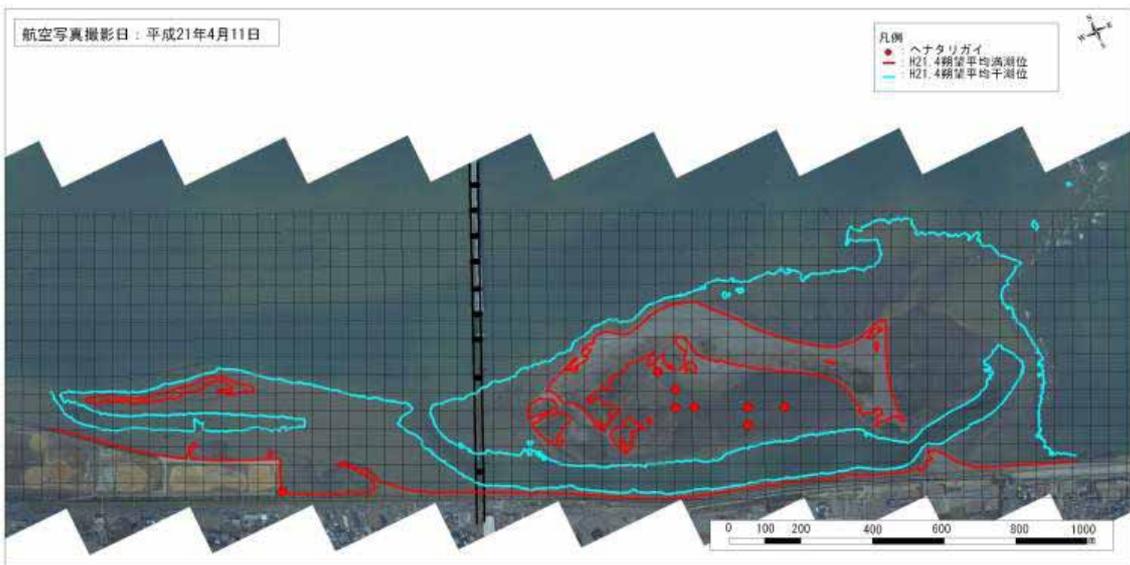
(オルソ画像：平成 19 年 10 月 7 日撮影)



平成 20 年 秋 ヘナタリガイ確認地点

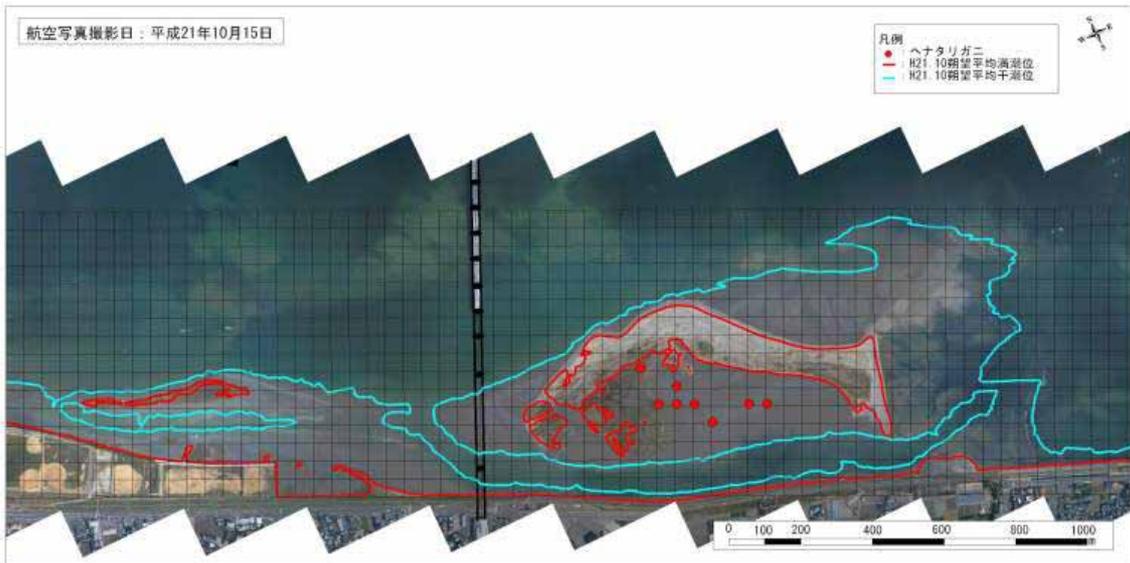
(オルソ画像：平成 20 年 11 月 12 日撮影)

図 6-3-3-7(4) ヘナタリガイ分布図 (4/6)



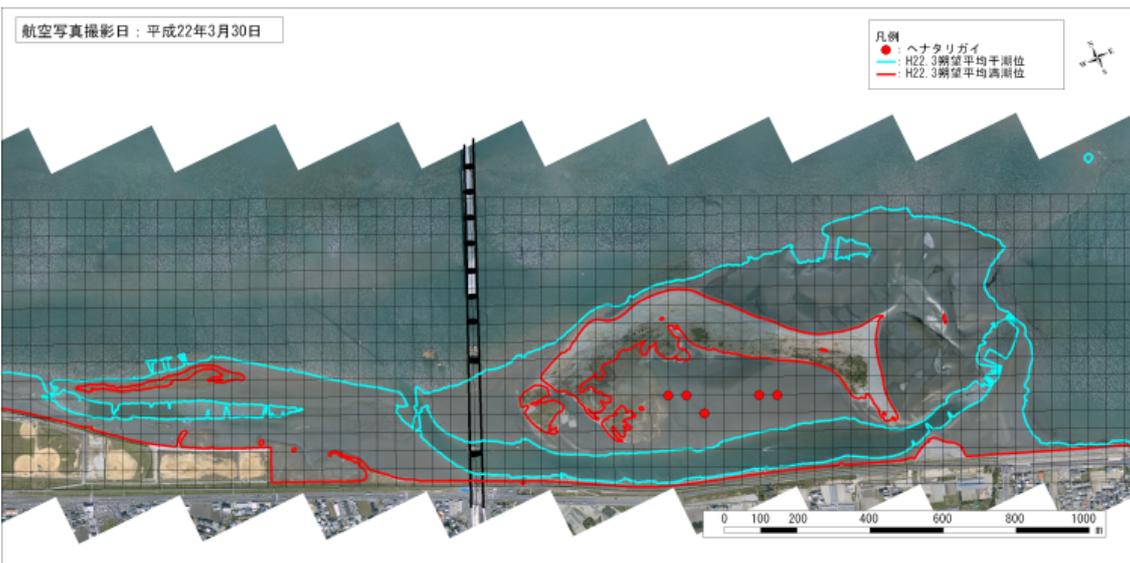
平成 21 年 春 ヘナタリガイ確認地点

(オルソ画像：平成 21 年 4 月 11 日撮影)



平成 21 年 秋 ヘナタリガイ確認地点

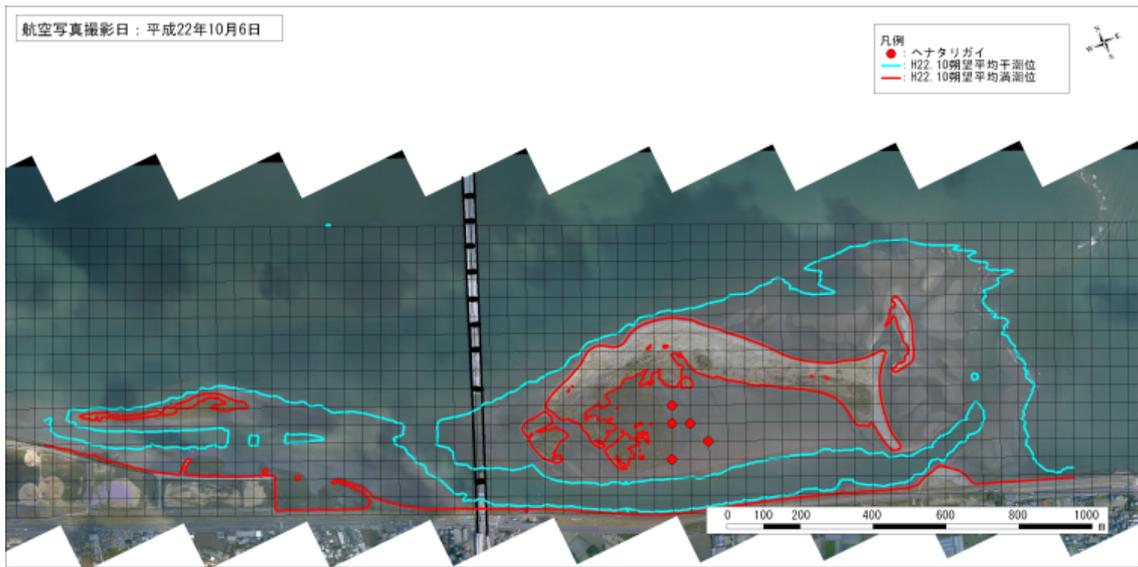
(オルソ画像：平成 21 年 10 月 15 日撮影)



平成 22 年 春 ヘナタリガイ確認地点

(オルソ画像：平成 22 年 3 月 30 日撮影)

図 6-3-3-7(5) ヘナタリガイ分布図 (5/6)



平成 22 年 秋 ヘナタリガイ確認地点

(オルソ画像：平成 22 年 10 月 6 日撮影)

図 6-3-3-7(6) ヘナタリガイ分布図 (6/6)

なし

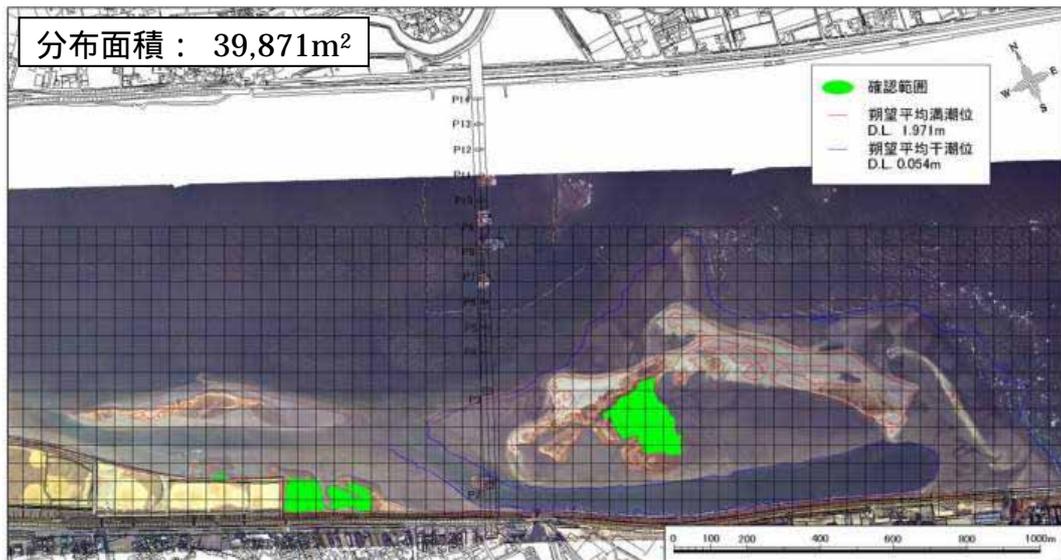
平成 15 年 春 ヒロクチカノコガイ確認範囲

(オルソ画像：平成 15 年 8 月 11 日撮影)

なし

平成 15 年 夏 ヒロクチカノコガイ確認範囲

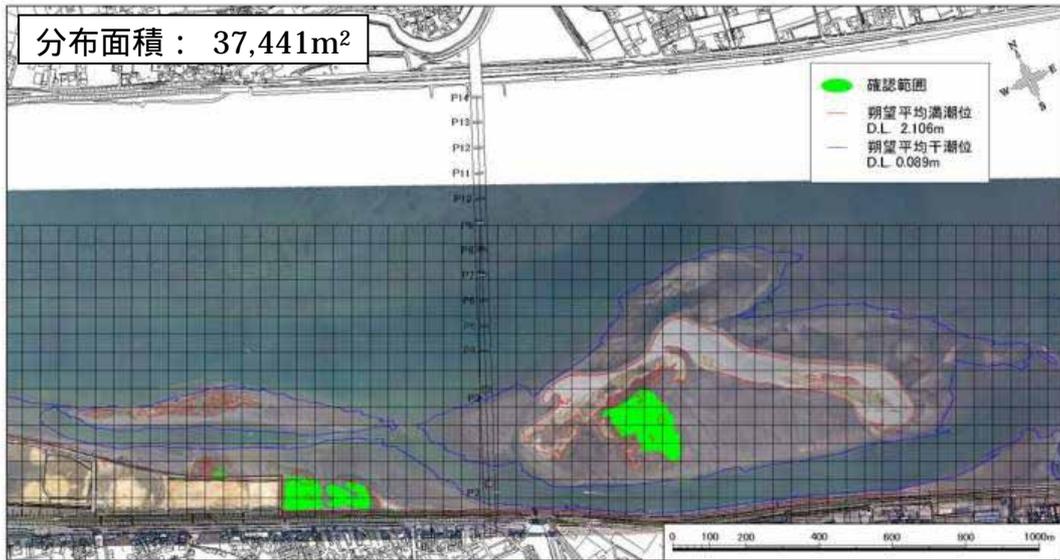
(オルソ画像：平成 15 年 8 月 11 日撮影)



平成 16 年 春 ヒロクチカノコガイ確認範囲

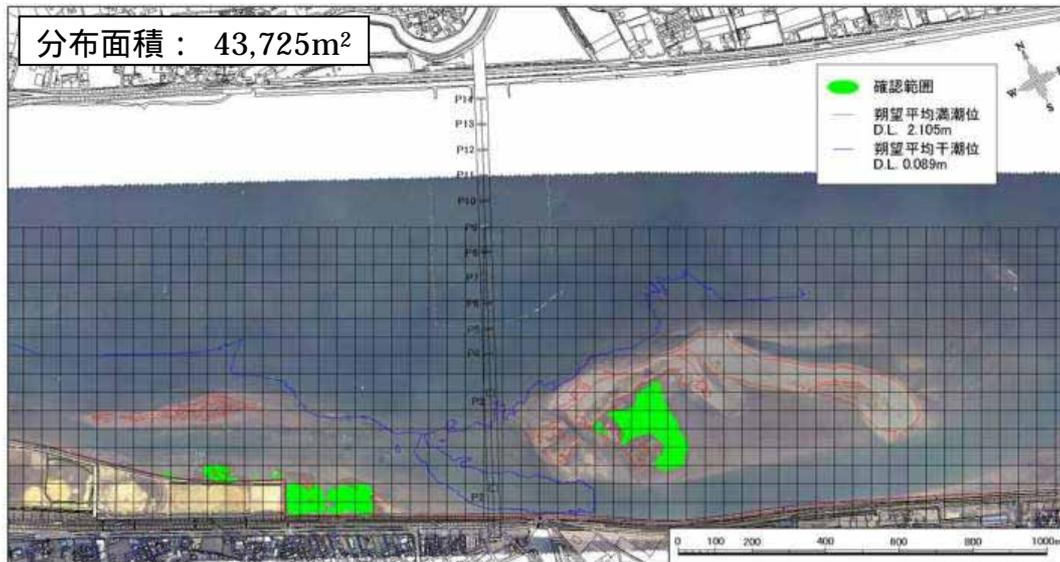
(オルソ画像：平成 16 年 3 月 10 日撮影)

図 6-3-3-8(1) ヒロクチカノコガイ分布図 (1/6)



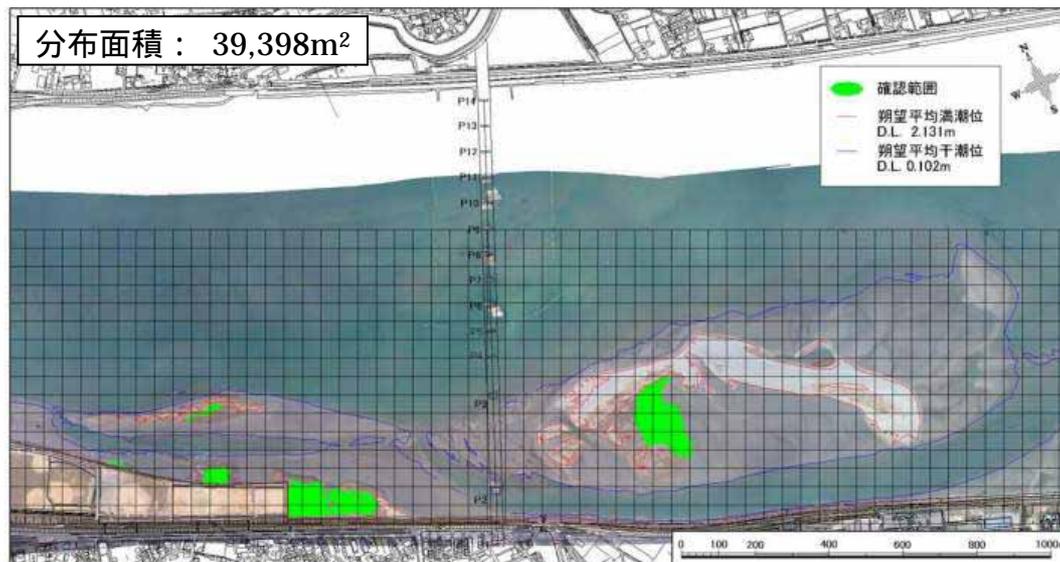
平成 16 年 夏 ヒロクチカノコガイ確認範囲

(オルソ画像：平成 16 年 10 月 14 日撮影)



平成 16 年 台風後 ヒロクチカノコガイ確認範囲

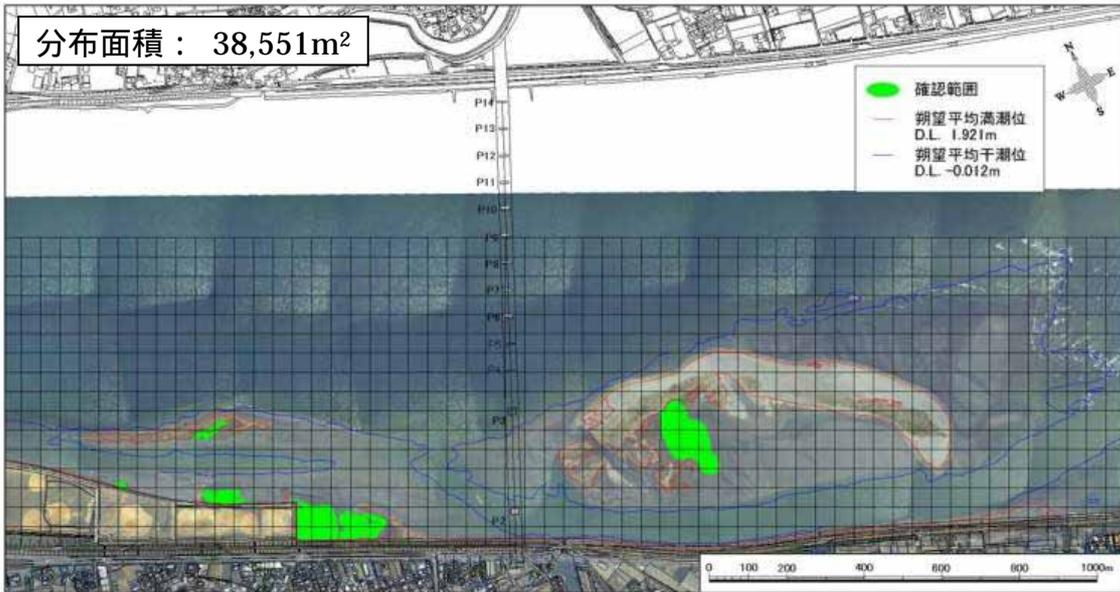
(オルソ画像：平成 16 年 11 月 8 日撮影)



平成 17 年 春 ヒロクチカノコガイ確認範囲

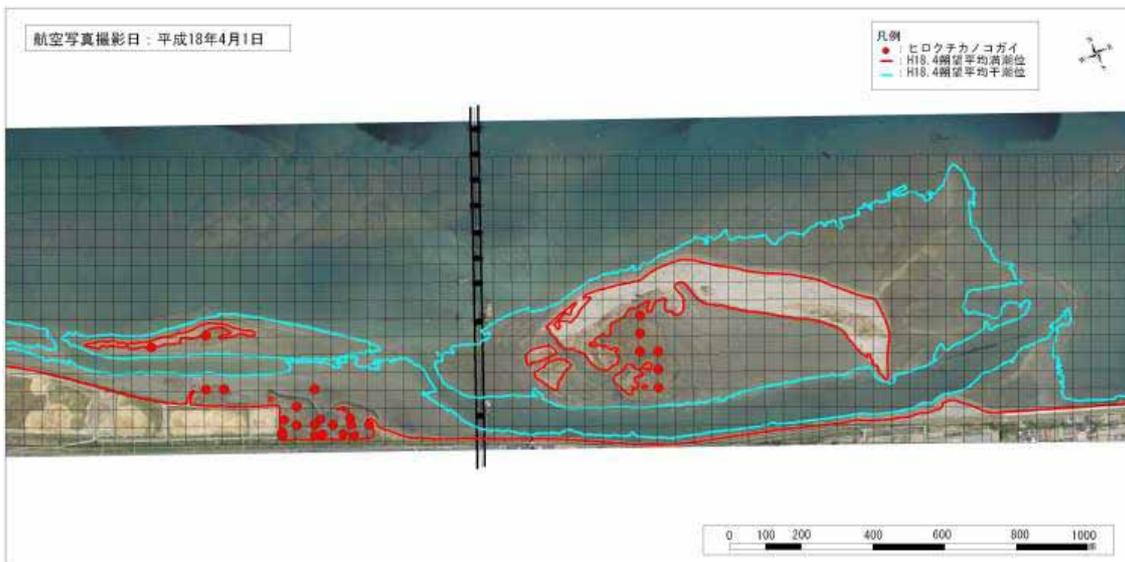
(オルソ画像：平成 17 年 3 月 14 日撮影)

図 6-3-3-8(2) ヒロクチカノコガイ分布図 (2/6)



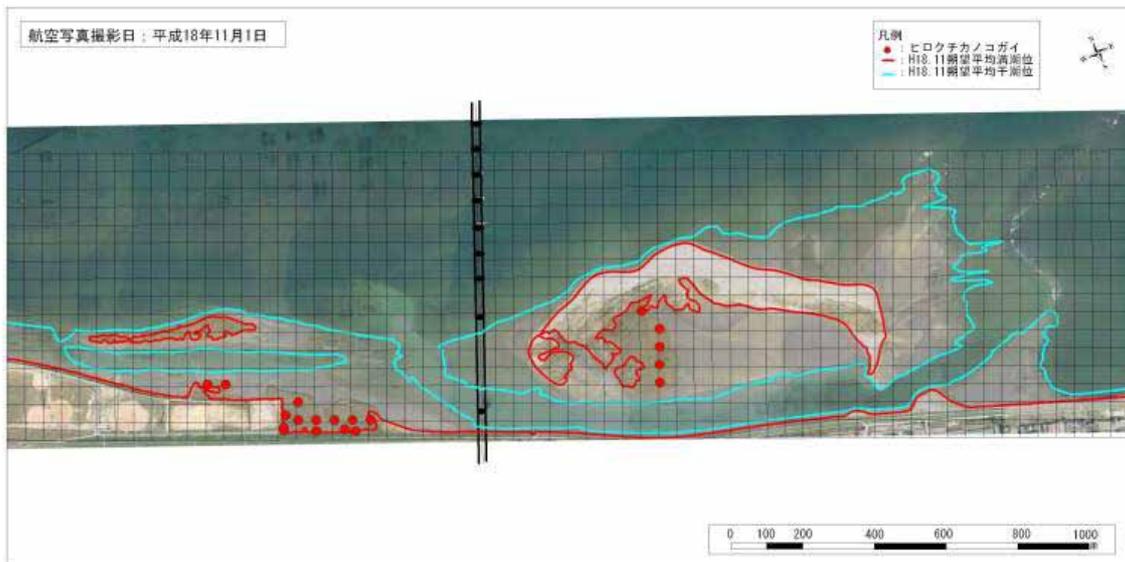
平成 17 年 夏 ヒロクチカノコガイ確認範囲

(オルソ画像：平成 17 年 9 月 30 日撮影)



平成 18 年 春 ヒロクチカノコガイ確認地点

(オルソ画像：平成 18 年 4 月 1 日撮影)



平成 18 年 秋 ヒロクチカノコガイ確認地点

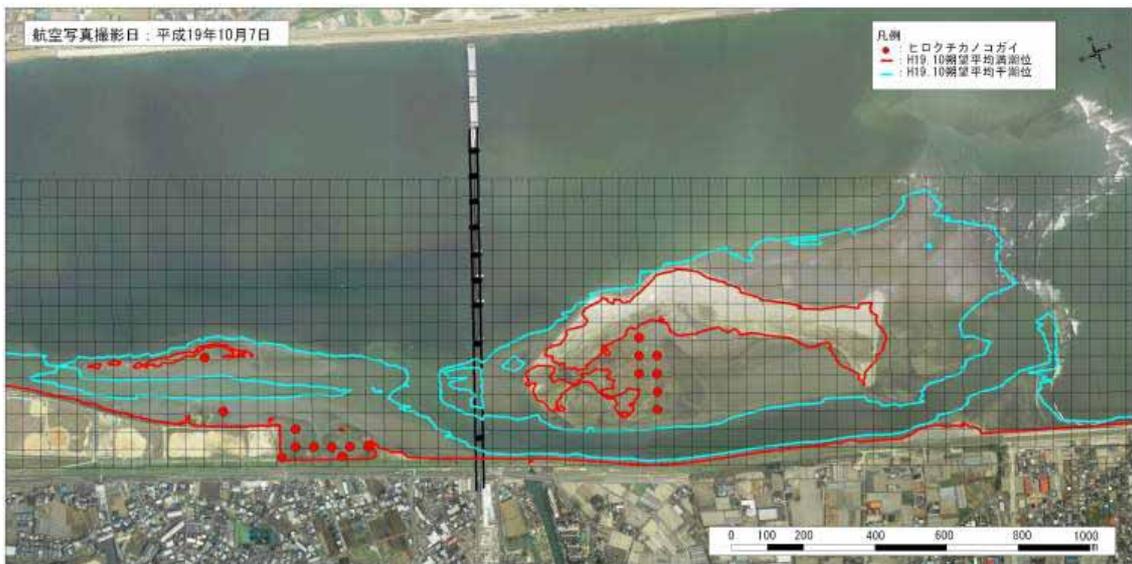
(オルソ画像：平成 18 年 11 月 1 日撮影)

図 6-3-3-8(3) ヒロクチカノコガイ分布図 (3/6)



平成 19 年 春 ヒロクチカノコガイ確認地点

(オルソ画像：平成 19 年 4 月 19 日撮影)



平成 19 年 秋 ヒロクチカノコガイ確認地点

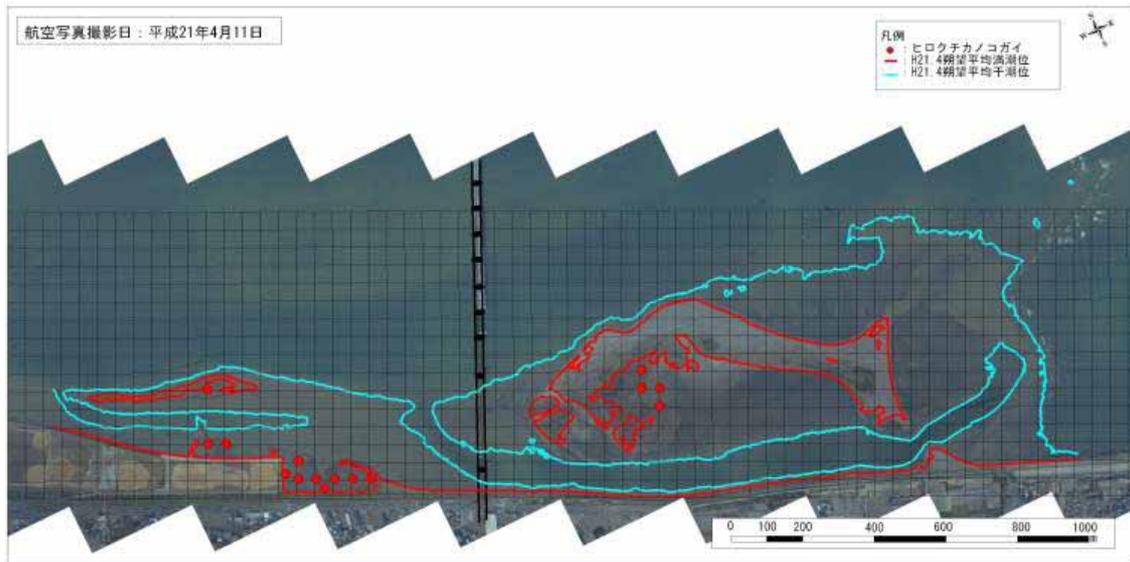
(オルソ画像：平成 19 年 10 月 7 日撮影)



平成 20 年 秋 ヒロクチカノコガイ確認地点

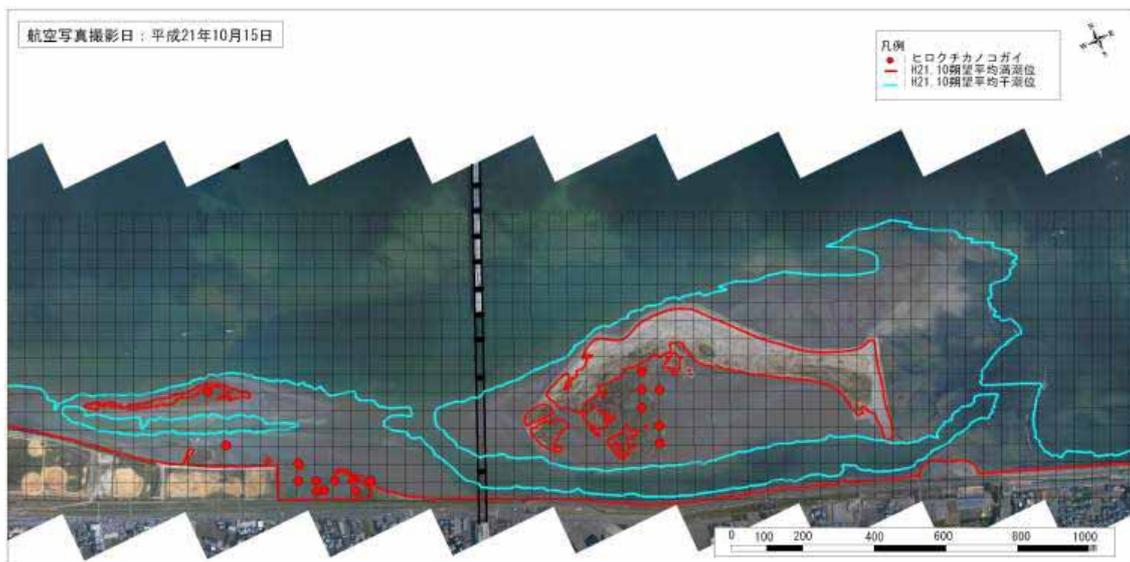
(オルソ画像：平成 20 年 11 月 12 日撮影)

図 6-3-3-8(4) ヒロクチカノコガイ分布図 (4/6)



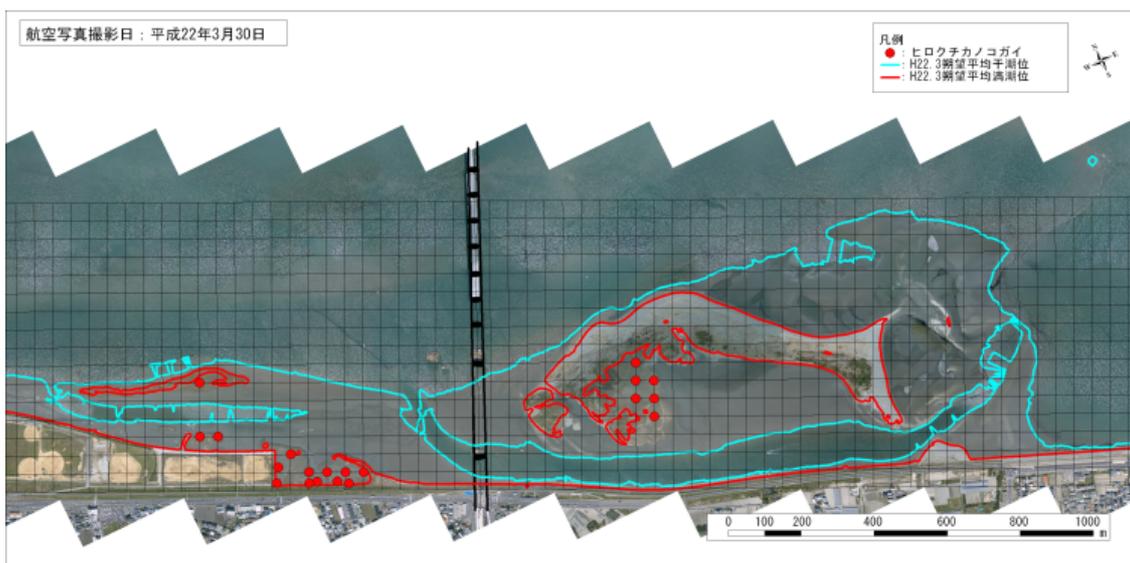
平成 21 年 春 ヒロクチカノコガイ確認地点

(オルソ画像：平成 21 年 4 月 11 日撮影)



平成 21 年 秋 ヒロクチカノコガイ確認地点

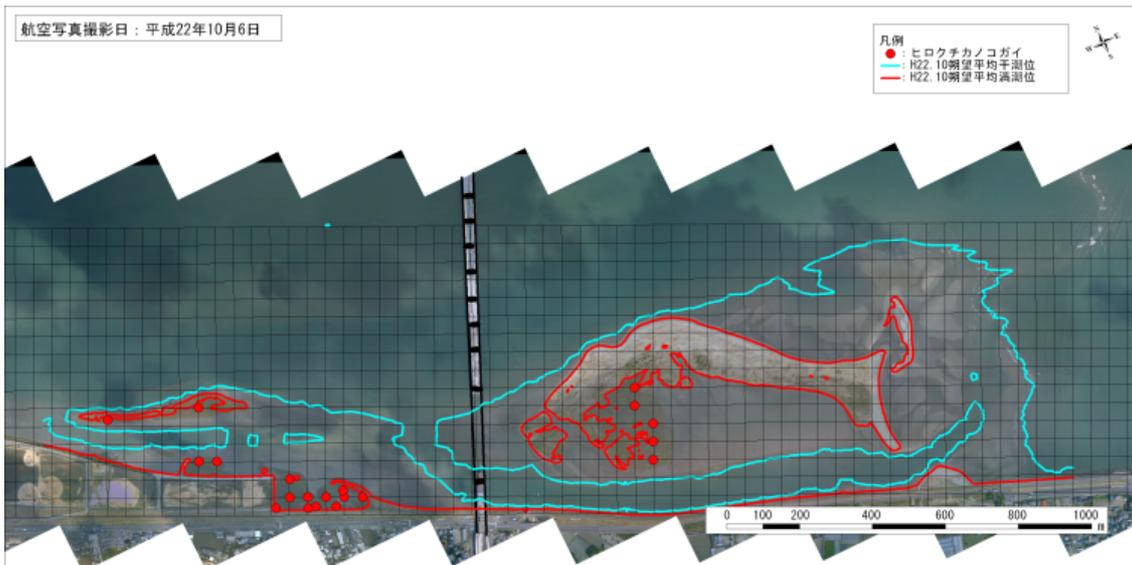
(オルソ画像：平成 21 年 10 月 15 日撮影)



平成 22 年 春 ヒロクチカノコガイ確認地点

(オルソ画像：平成 22 年 3 月 30 日撮影)

図 6-3-3-8(5) ヒロクチカノコガイ分布図 (5/6)



平成 22 年 秋 ヒロクチカノコガイ確認地点

(オルソ画像：平成 22 年 10 月 6 日撮影)

図 6-3-3-8(6) ヒロクチカノコガイ分布図 (6/6)

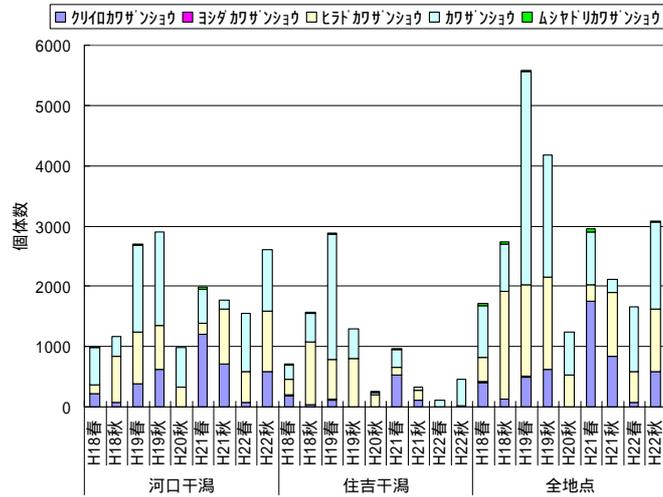
6-3-4 カワザンショウ類の経年変化

平成 18 年度以降のヨシ原調査において確認された 5 種のカワザンショウ類の経年確認状況を図 6-3-4-1～図 6-3-4-6 にそれぞれ示す。また、ヨシ原調査地点の地盤高および含泥率を図 6-3-4-7 に示す。

河口干潟、住吉干潟では、ヒラドカワザンショウ、カワザンショウが平成 21 年度を除けば経年的に概ね優占種として確認されている。

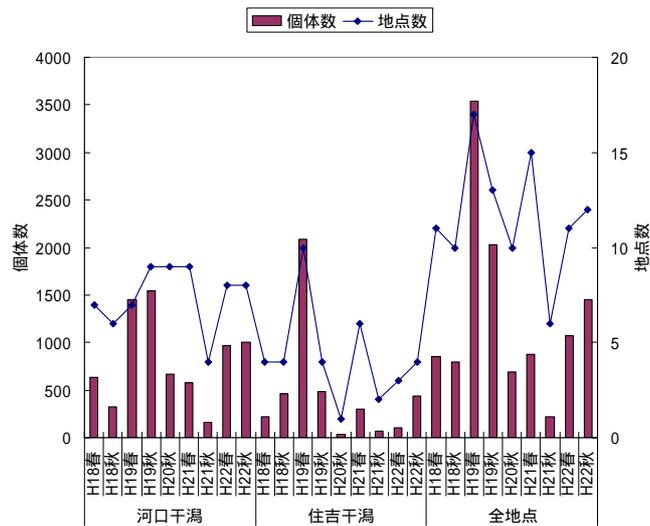
種別の確認個体数および地点数の経年変化の概況は以下の通りである。

- ・ カワザンショウの確認個体数および地点数は、河口干潟では平成 19 年度に最大となり、その後、減少したものの平成 22 年度には増加傾向に転じている。一方、住吉干潟では、平成 19 年度の春季に最大となるが、近年は平成 18 年度と概ね同様の水準にある。
- ・ クリイロカワザンショウの確認個体数および地点数は、河口干潟では平成 21 年度の春季に最大となるが、その後は平成 19 年度と概ね同様の水準にある。一方、住吉干潟では、季節や年によって確認されないときがあり、出現が不安定である。
- ・ ムシヤドリカワザンショウは、確認個体数および地点数は少ないものの、河口干潟では春季を中心に、概ね経年的に確認されている。一方、住吉干潟でも確認個体数および地点数は少ないものの、平成 21 年度の春季までは概ね経年的に確認されていたが、平成 21 年度の秋季より確認が途絶えている。本種の確認地点における地盤高および含泥率は、平成 21 年度の春季から現在まで大きな変化が認められないことを考慮すると、地盤高や含泥率以外の要因によって確認が途絶えたものと考えられる。
- ・ ヒラドカワザンショウの確認個体数および地点数は、河口干潟では平成 19 年度以降減少傾向にあったが、平成 21 年度の秋季以降は回復傾向がみられる。一方、住吉干潟では平成 19 年度以前と比較して減少する傾向にある。住吉干潟は、地盤高に変動がみられるものの、本種の増減と連動していない。また、含泥率にも顕著な変化が認められない。さらに、生息が確認された地点の地盤高および含泥率の範囲は減少傾向にないカワザンショウ、クリイロカワザンショウと比較しても広い（図 6-3-4-8 参照）。これらのことから、住吉干潟における地盤高や含泥率の変化が、本種の減少要因にはなっていないものと考えられる。
- ・ ヨシダカワザンショウは、平成 18 年度および平成 19 年度に住吉干潟で確認されたが、これ以降は確認されていない。本種は最も確認例が少なく、住吉干潟の No.-7.5_150 で平成 19 年度の秋季に 8 個体、No.-8.0_300 で平成 18 年度の秋季に 16 個体、平成 19 年度の春季に 24 個体がそれぞれ確認されたのみである。No.-7.5_150 では、確認された当時から現在まで地盤高や含泥率に大きな変化が認められないことを考慮すると、地盤高や含泥率以外の要因によって減少しているものと考えられる。



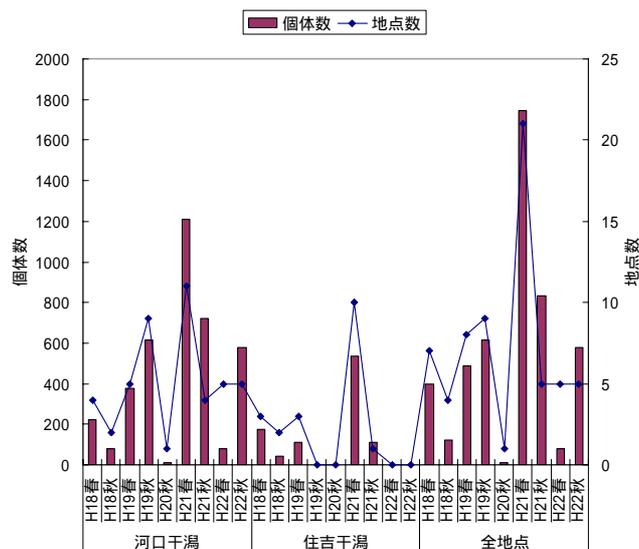
注)個体数は、1地点あたりの個体/m²を算出し、集計したものである。

図 6-3-4-1 カワザンショウ類の経年確認状況



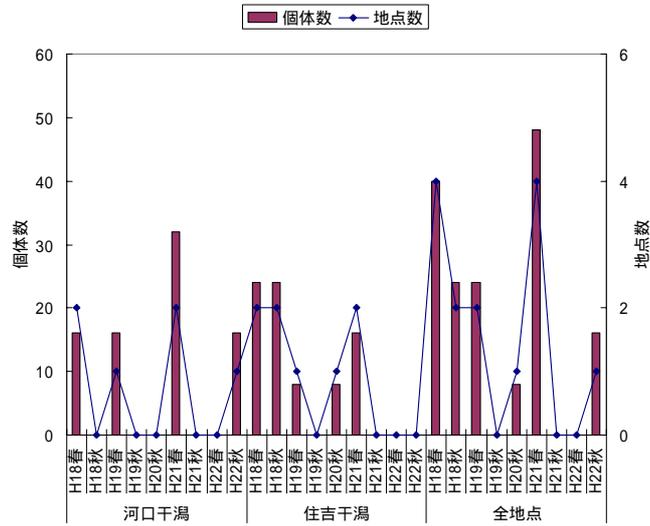
注)個体数は、1地点あたりの個体/m²を算出し、集計したものである。

図 6-3-4-2 カワザンショウの経年確認状況



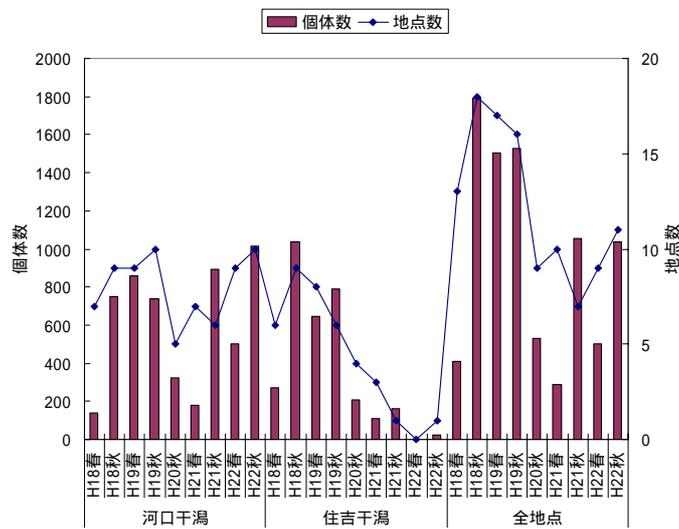
注)個体数は、1地点あたりの個体/m²を算出し、集計したものである。

図 6-3-4-3 クレイロカワザンショウの経年確認状況



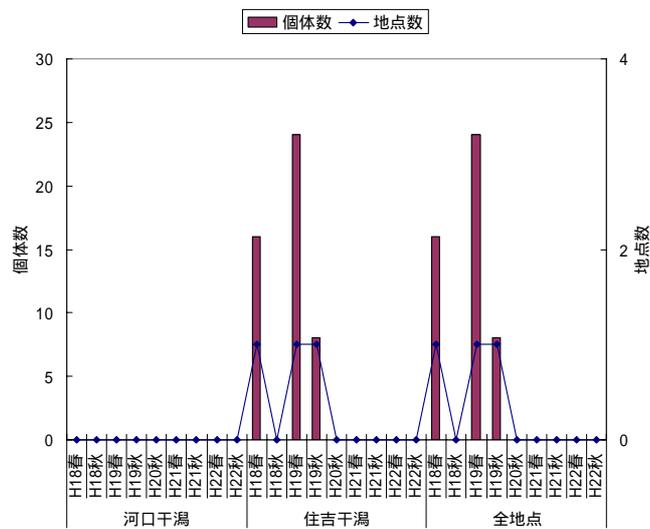
注)個体数は、1地点あたりの個体/m²を算出し、集計したものである。

図 6-3-4-4 ムシヤドリカワザンショウの経年確認状況



注)個体数は、1地点あたりの個体/m²を算出し、集計したものである。

図 6-3-4-5 ヒラドカワザンショウの経年確認状況



注)個体数は、1地点あたりの個体/m²を算出し、集計したものである。

図 6-3-4-6 ヨシダカワザンショウの経年確認状況

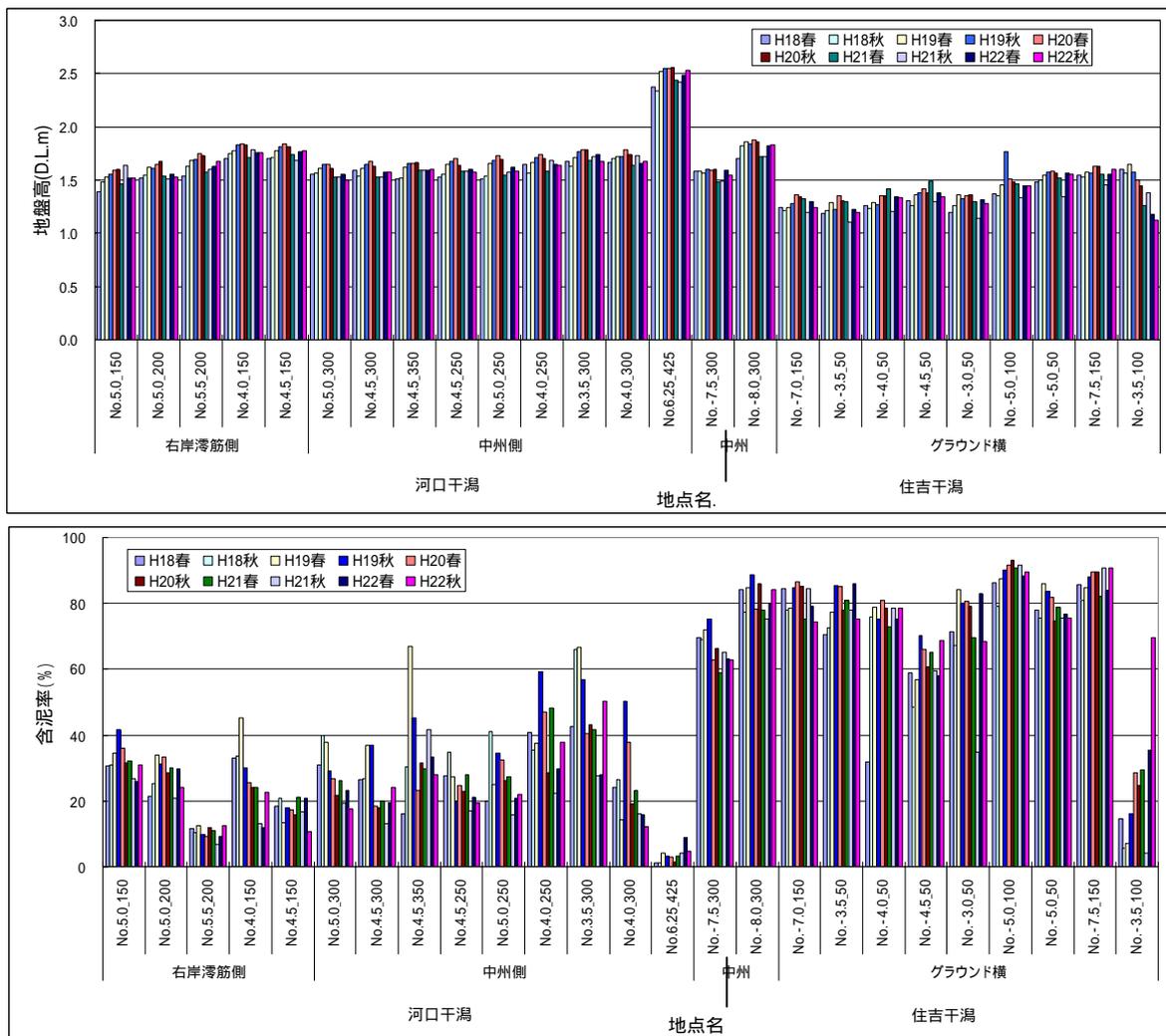
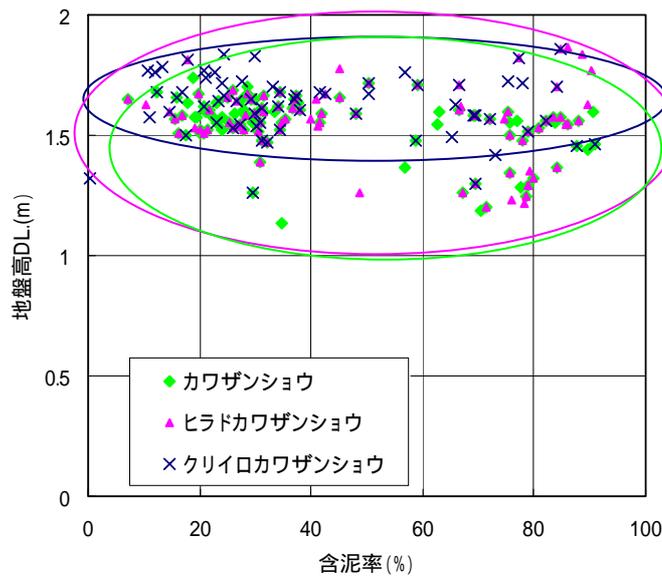


図 6-3-4-7 ヨシ原調査地点における地盤高および含泥率の経年変化



注)確認地点の地盤高および含泥率のデータは平成 18 年度～平成 22 年度のものを使用している。

図 6-3-4-8 カワザンショウ類 3 種の確認地点の地盤高および含泥率

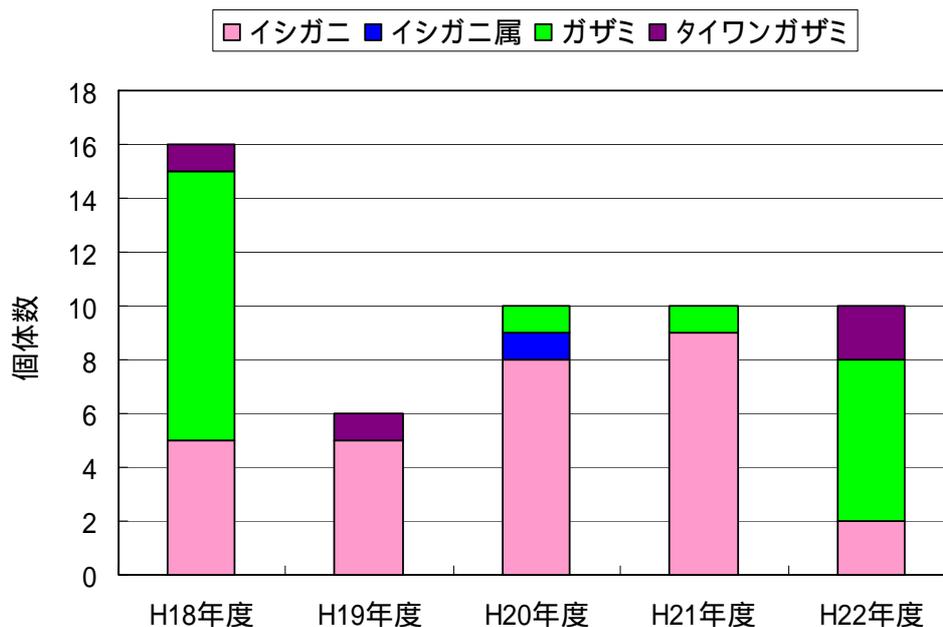
6-3-5 ガザミ類の経年変化

ガザミ類調査で確認されたガザミ類の個体数の経年変化を図 6-3-5-1 に示す。

ガザミは平成 18 年度に 10 個体と最も多く確認された後は減少傾向にあったが、平成 22 年度には 6 個体が確認され、増加傾向に転じている。

イシガニは平成 18 年度から平成 21 年度まで 5～9 個体で推移していたが、平成 22 年度には 2 個体に減少している。

タイワンガザミは平成 20 年度および平成 21 年度に確認が途絶えていたが、平成 22 年度には再び確認されている。



注)H18 年度は春季・秋季の両時期に F 地点でカニ籠を紛失しており、一部データが欠測している。

H21 年度は秋季に F、H 地点でカニ籠を紛失しており、一部データが欠測している。

図 6-3-5-1 ガザミ類確認状況の経年変化

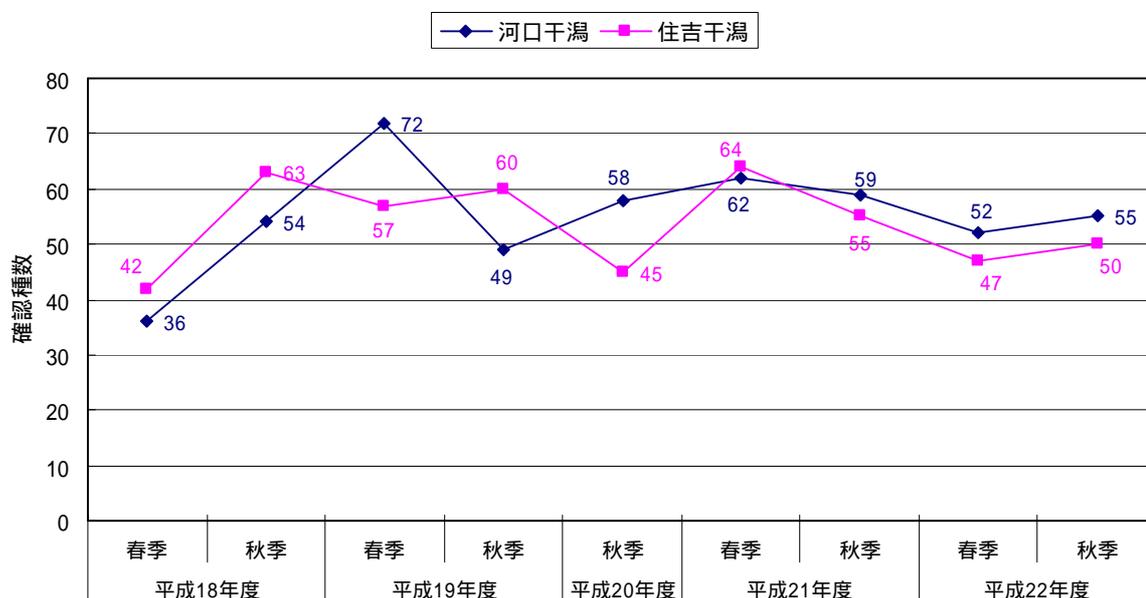
6-3-6 定量調査

6-3-6-1 定量調査における確認種の経年変化

現行の定量調査が開始された平成 18 年度以降の干潟ごとの確認種数の経年変化を図 6-3-6-1 に示す。

河口干潟の確認種数は、最小種数となった平成 18 年度の春季と最大種数となった平成 19 年度の春季を除くと、50～60 種程度の範囲で推移している。

住吉干潟の確認種数は、平成 18 年度の春季以降、42～64 種の範囲で増減を繰り返している。調査地点数は河口干潟の 45 地点（平成 19 年度のみ 44 地点）に対して 26 地点と少ないが、確認種数に大きな差はみられない。住吉干潟には右岸側の泥質干潟、中州のヨシ原など、範囲は狭いが多様な環境が存在し、これらの環境に適応した多種の底生生物が生息しているため、河口干潟と同等の確認種数が得られたものと考えられる。



注 1) 河口干潟 45 地点（平成 19 年度のみ 44 地点）、住吉干潟 26 地点で調査を実施している。

2) 平成 20 年度は春季に調査を実施していない。

図 6-3-6-1 確認種数の経年変化（定量調査）

平成 18 年度以降の定量調査結果における、個体数でみた干潟ごとの優占種を表 6-3-6-1 に示す。

河口干潟は、春季、秋季ともに全調査年度においてマルソコエビ属の一種が第一位の優占種となっている。第二位～五位の優占種は、入れ替わりや季節変化はあるもののトリウミアカイソモドキ、スナモグリ属の一種、コメツキガニ、エドガワミズゴマツボが概ね上位の優占種に含まれる傾向に、調査年度間で大きな違いはない。

住吉干潟は、春季、秋季ともに河口干潟に比べ、優占順位の入替わりが激しい。しかし、チゴガニ、ヨコヤアナジャコ、エドガワミズゴマツボ、ヤマトオサガニ等が、第一位～五位の優占種に含まれる傾向に、調査年度間での大きな違いはない。

河口干潟、住吉干潟で、それぞれの優占種がエドガワミズゴマツボ、スナモグリ属の一種を除き大きく異なるのは、砂分を主体とする河口干潟と、泥分を主体とする住吉干潟の底質の違いを反映したものである。

表 6-3-6-1 個体数でみた上位優占種（定量調査）

河口干潟 【春季】						
調査年度	優占順位	第一位	第二位	第三位	第四位	第五位
H18		マルソコエビ属	コメツキガニ	イソジミ	トリウミアカイソモドキ	ヒメスナホリムシ
H19		マルソコエビ属	スナモグリ属	アサリ	トリウミアカイソモドキ	コメツキガニ
H21		マルソコエビ属	トリウミアカイソモドキ	スナモグリ属	コメツキガニ	短尾下目(カ011期幼生)
H22		マルソコエビ属	トリウミアカイソモドキ	スナモグリ属	コメツキガニ	ソトオリガイ

【秋季】						
調査年度	優占順位	第一位	第二位	第三位	第四位	第五位
H18		マルソコエビ属	コメツキガニ	スナモグリ属	ニホンスナモグリ	スナウミナナフシ属
H19		マルソコエビ属	トリウミアカイソモドキ	エドガワミズゴマツボ	スナモグリ属	ヨコヤアナジャコ
H20		マルソコエビ属	トリウミアカイソモドキ	スナモグリ属	エドガワミズゴマツボ	コメツキガニ
H21		マルソコエビ属	トリウミアカイソモドキ	ヨコヤアナジャコ	スナモグリ属	コケガイ
H22		マルソコエビ属	エドガワミズゴマツボ	コメツキガニ	<i>Pseudopolydora</i> sp.	スナモグリ属

住吉干潟 【春季】						
調査年度	優占順位	第一位	第二位	第三位	第四位	第五位
H18		チゴガニ	ヤマトオサガニ	ニホントロクダムシ	コメツキガニ	ナキサスナホリムシ属
H19		<i>Heteromastus</i> sp.	スナモグリ属	チゴガニ	エドガワミズゴマツボ	マルソコエビ属
H21		エドガワミズゴマツボ	<i>Heteromastus</i> sp.	<i>Glycera</i> sp.	トリウミアカイソモドキ	スナモグリ属
H22		<i>Heteromastus</i> sp.	ヤマトオサガニ	チゴガニ	スナモグリ属	エドガワミズゴマツボ

【秋季】						
調査年度	優占順位	第一位	第二位	第三位	第四位	第五位
H18		チゴガニ	ヨコヤアナジャコ	エドガワミズゴマツボ	スナウミナナフシ属	ヤマトオサガニ
H19		<i>Heteromastus</i> sp.	エドガワミズゴマツボ	ヨコヤアナジャコ	ヤマトオサガニ	スナモグリ属
H20		エドガワミズゴマツボ	スナモグリ属	トリウミアカイソモドキ	<i>Glycera</i> sp.	ヨコヤアナジャコ
H21		ヨコヤアナジャコ	<i>Heteromastus</i> sp.	エドガワミズゴマツボ	チゴガニ	ヤマトオサガニ
H22		エドガワミズゴマツボ	トロクダムシ属	<i>Heteromastus</i> sp.	スナモグリ属	ヨコヤアナジャコ

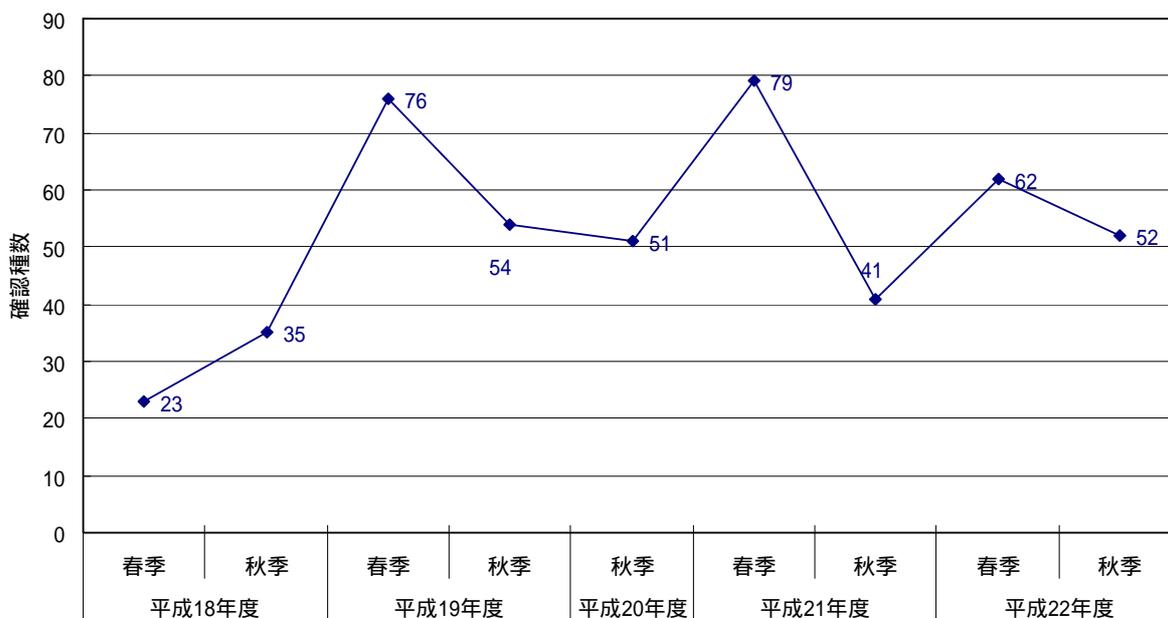
注 1)河口干潟 45 地点（平成 19 年度のみ 44 地点）、住吉干潟 26 地点で調査を実施している。
2)平成 20 年度は春季に調査を実施していない。

6-3-6-2 浅海域河床底質調査地点での定量調査における確認種の経年変化

平成 18 年度以降の浅海域河床底質調査地点での定量調査結果について、確認種数の経年変化を図 6-3-6-2 に示す。

調査地点数が 3 地点であった平成 18 年度の春季は、確認種数が 23 種と最小だが、平成 18 年度の秋季以降はこれより多い 35 ~ 79 種の間で推移している。

季節別に確認種数をみると、春季、秋季の 2 回の調査が実施された平成 19 年度、平成 21 年度および平成 22 年度は、いずれも春季の確認種数が秋季を上回っている。



注 1)平成 19 年度は春季のみ 3 地点、平成 19 年度の秋季以降は 6 地点で調査を実施している。

2)平成 20 年度は春季に調査を実施していない。

図 6-3-6-2 確認種数の経年変化（浅海域河床底質調査：定量調査）

平成 18 年度以降の浅海域河床底質調査地点での定量調査結果における個体数でみた優占種を表 6-3-6-2 に示す。

平成 18 年度以降実施された 9 回の調査のうち、8 回でホトトギスガイが第一位の優占種となっている。本種は河床でマット状に集団を形成することから、第一位の優占種になる機会が多かったものと考えられる。

ホトトギスガイ以外では、各調査年度において、アサリ、エドガワミズゴマツボ、カタマガリギボシイソメが上位の優占種になっている。

表 6-3-6-2 個体数でみた上位優占種（浅海域河床底質調査：定量調査）

【春季】

調査年度	優占順位	第一位	第二位	第三位	第四位	第五位
H18		アサリ	ホトトギスガイ	ケファロツックス科	アナシヤコ属	<i>Goniada</i> sp.
H19		ホトトギスガイ	アサリ	エドガワミズゴマツボ	カタマガリギボシイソメ	<i>Mediomastus</i> sp.
H21		ホトトギスガイ	カタマガリギボシイソメ	シズクガイ	Euclymeniae 亜科	トケウレカラ
H22		ホトトギスガイ	ワラジヘラムシ属	カタマガリギボシイソメ	カガミガイ	アサリ

【秋季】

調査年度	優占順位	第一位	第二位	第三位	第四位	第五位
H18		ホトトギスガイ	アサリ	エドガワミズゴマツボ	ニホンスナモグリ	<i>Heteromastus</i> sp.
H19		ホトトギスガイ	エドガワミズゴマツボ	アサリ	マテガイ	<i>Cossura</i> sp.
H20		ホトトギスガイ	カタマガリギボシイソメ	ケンサキスビオ	スナモグリ属	<i>Cossura</i> sp.
H21		ホトトギスガイ	エドガワミズゴマツボ	<i>Pseudopolydora</i> sp.	カタマガリギボシイソメ	アラムシロガイ
H22		ホトトギスガイ	エドガワミズゴマツボ	マテガイ	<i>Pseudopolydora</i> sp.	<i>Glycera</i> sp.

注 1)平成 19 年度は春季のみ 3 地点、平成 19 年度の秋季以降は 6 地点で調査を実施している。

2)平成 20 年度は春季に調査を実施していない。

6-3-7 ウモレマメガニの経年変化、生活史および基盤環境との関係

6-3-7-1 ウモレマメガニの確認状況の経年変化

平成 17 年度～平成 22 年度のウモレマメガニの確認状況を表 6-3-7-1 に、確認地点位置を図 6-3-7-1 にそれぞれ示す。

東環状モニタリング調査におけるウモレマメガニの確認状況は、平成 17 年春季に行われた「航路浚渫に係る底質・底生生物調査」で 200 個体以上が確認された結果が最初である。

その後、平成 18 年度以降継続して調査を行った結果、平成 20 年度までは各調査で 5 個体前後が確認されてきた。平成 21 年度以降は、調査地点数や調査時期が増えたことにより、各調査での確認個体数は増加し、最も確認個体数が多かったのは平成 22 年 3 月の 152 個体（14 地点）であった。

確認地点をみると、橋脚の上流側では 1-2、St.4-1、2-2、4-2、SYN-5 で、下流側では 6-6 で確認頻度が高かった。

表 6-3-7-1 (1) ウモレマメガニ確認状況(平成17年度～22年度)

調査時期	測点	個体数 (実数)	採取 方法	地盤高DL (m)	含泥率 (%)	備考
平成17年5月	1-2	9		-0.082	-	H17年5月調査
	2-1	2		-3.112	-	
	2-2	18		-0.422	-	
	2-3	29		0.128	-	
	3-1	2		-1.732	-	
	3-2	28		-0.482	-	
	3-3	7		-0.132	-	
	4-1	89		-2.092	-	
	4-2	69		-0.642	-	
平成17年7月	N9	2		-0.259	3.0	H17年7月調査
平成18年10月	U-14	1		-1.278	14.2	H18年10月調査
	St.3-1	3		-0.695	26.8	
	St.4-1	1		0.510	19.6	
平成19年6月	U-01	1		-0.251	10.2	H19年6月調査
	U-04	1		-1.040	19.5	
	U-13	1		-4.549	88.2	
	St.4-1	1		-0.190	16.8	
	H	1		-1.642	29.0	
	No2.5.400	2		0.266	2.1	
平成20年7月	SYU-4	1		-0.742	27	H20年7月調査
	SYU-5	1		-0.672	17.1	
	SYU-6	4		-1.302	11.8	
平成20年9月	J	1		-1.180	7.9	H20年9月調査
	2-3	4		-0.850	21.7	
平成21年4月	1-2	4		-0.317	9.2	H21年4月ウモレマメガニ詳細調査
	2-2	1		-0.569	9.5	
	3-1	5		-1.159	16.5	
	3-3	1		-0.174	9.5	
	St.4-1	6		-0.373	7.9	
	4-2	4		-0.787	9.4	
	4-3	2		-0.528	8.4	
	5-4	1		-0.582	6.2	
	6-2	3		-0.740	9.5	
	6-3	1		-2.566	48.2	
	6-4	2		-0.795	10.3	
	6-6	1		-1.519	9.5	
	U-01	5		-1.024	14.6	
	平成21年5月	2-2	1		-0.853	
St.4-1		4		-0.524	9.7	
4-2		3		-0.202	6.3	
6-6		1		-1.375	27.8	
U-01		4		-1.265	17.1	
平成21年6月	1-2	2		-0.118	16.0	H21年6月ウモレマメガニ詳細調査
	2-2	3		-0.798	11.3	
	St.4-1	1		-1.340	17.1	
	4-2	1		-1.178	20.0	
	5-4	1		-1.447	21.1	
	6-2	1		-0.884	10.5	
	6-6	1		-1.679	9.7	
平成22年3月	U-07	1		-0.587	10.2	H22年3月ウモレマメガニ詳細調査
	1-2	25		-1.331	11.2	
	1-3	1		-0.164	19.8	
	2-2	16		-1.092	18.1	
	2-3	7		-1.369	7.0	
	St.4-1	9		-1.064	7.7	
	4-2	28		-0.925	7.7	
	5-6	10		-0.988	11.2	
	6-2	6		-1.326	14.9	
	6-4	3		-1.702	14.3	
	6-6	5		-1.640	13.6	
	U-01	8		-1.089	10.1	
	U-07	10		-0.583	3.8	
	U-12	20		-0.492	11.2	
U-14	4		-0.530	12.2		

注1) 東環状モニタリング調査は平成15年8月から調査を開始しているが、平成17年5月以前はウモレマメガニは確認されていない。

2) 記載した個体数は、実数である。

3) 採取方法は調査時のウモレマメガニ採取方法を示す。
 : スミスマッキンタイヤ-式採泥器で試料を採取
 : 干潟上で0.25×0.25×0.20m内の試料を採取
 : 潜水作業で8L×2本分試料を採取

表 6-3-7-1 (2) ウモレマメガニ確認状況 (平成 17 年度 ~ 22 年度)

調査時期	測点	個体数 (実数)	採取 方法	地盤高DL. (m)	含泥率 (%)	備考
平成22年4月	1-2	2		0.088	7.4	H22年4月ウモレマメガニ詳細調査
	1-3	2		-0.159	14.0	
	2-1	2		-3.187	64.2	
	2-2	6		-1.747	15.0	
	St.4-1	11		-1.115	8.0	
	4-2	12		-0.912	4.7	
	6-2	1		-3.376	21.6	
	U-01	17		-1.195	18.7	
	7-1	1		-3.697	31.7	
	SYN-5	2		-1.522	4.4	
平成22年5月	1-2	2		-0.022	12.9	H22年5月ウモレマメガニ詳細調査
	1-3	2		-0.179	19.2	
	2-2	2		-1.745	3.9	
	2-3	4		-1.678	13.8	
	St.4-1	6		-0.829	7.2	
	4-2	3		-0.965	9.9	
	5-2	1		-3.125	26.1	
	5-6	11		-0.908	6.2	
	6-6	5		-3.239	3.5	
	SYN-4	4		-1.853	41.2	
平成22年6月	SYN-5	2		-0.590	3.2	H22年6月ウモレマメガニ詳細調査 H22年6月ウモレマメガニ広域調査 H22年6月浅海域河床定量調査
	4-2	5		-1.170	10.6	
	5-1	1		-3.243	9.4	
	5-3	1		-3.229	49.9	
	5-6	5		-1.785	4.4	
	SYN-5	1		-0.198	8.4	
	SYN-6	3		-1.200	6.4	
平成22年7月	U-09	1		-2.637	39.4	H22年7月ウモレマメガニ詳細調査
	J	6		-1.252	17.9	
	SYN-5	2		-1.657	34.9	
平成22年9月	D	1		-2.666	81.2	H22年9月浅海域河床定量調査

注1) 東環状モニタリング調査は平成15年8月から調査を開始しているが、平成17年5月以前はウモレマメガニは確認されていない。

2) 記載した個体数は、実数である。

3) 採取方法は調査時のウモレマメガニ採取方法を示す。
 : スミスマッキンタイヤ-式採泥器で試料を採取
 : 干潟上で0.25×0.25×0.20m内の試料を採取
 : 潜水作業で8L×2本分試料を採取

